

2022.12.10 vol.3

紫陽会

神戸大学 国際人間科学部同窓会



発行 神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会 会長 青木荘一郎
〒650-0011 神戸市中央区下山手通6-2-19
電話：078-371-6322 FAX：078-371-6306 郵便振替：01140-0-84600
Email：kobe-ajisai@shiyohkai.com URL：https://shiyohkai.com/

印刷 交友印刷株式会社
電話：078-303-0088 (代)

表紙題字 書家 和田 彩 氏

真摯・自由・協同

神戸大学の学風「真摯・自由・協同」を大筆と墨で書いた。

時折、グラウンドから学生たちの声が聞こえてくる。

ここは いつも いい風が吹いている。

頭の中にイメージが浮かんだ。

私の作品が空に舞う。

和田 彩



プロフィール

和田 彩 AYA WADA

わだ・あや 書家／筆跡鑑定士／学術博士

兵庫県神戸市生まれ

1991年 神戸大学教育学部卒業

1993年 神戸大学大学院 学校教育研究科修了

2010年 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了 博士号取得

神戸芸術文化会議会員，兵庫県書作家協会理事，飛雲会理事，六彩舎主宰

〔主な受賞歴〕

1994年 兵庫県書道展 神戸市長賞

2005年 毎日書道展 毎日賞

2018年 神戸市文化奨励賞

2020年 紫陽会賞

2021年 芸術文化団体「半どんの会」文化賞



和田彩／六彩舎QR

目次

表紙に寄せて・作者紹介	表紙裏
ごあいさつ	4
神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会	会長 青木 荘一郎
神戸大学 国際人間科学部	学部長 近藤 徳彦
神戸大学 国際人間科学部	前学部長 青木 茂樹
【特集】国際人間科学部の今	
学科紹介	7
○グローバル文化学科	学科長 貞好 康志 4回生 長谷川舞香
○発達コミュニティ学科	学科長 岸本 吉弘 4回生 大家 舞
○環境共生学科	学科長 太田 和宏 4回生 大藪 愛紗
○子ども教育学科	学科長 木下 孝司 4回生 畠山いぶき
グローバル・スタディーズ・プログラム (GSP)	13
コロナ禍におけるGSP運営	GSPオフィス室長 村尾 元
違いを楽しむ, 人と関わる	環境共生学科 4回生 生水口 翼
コロナ禍の留学	グローバル文化学科 4回生 生駒 芙美乃 ぱある
神戸大学附属学校園の現状	15
	神戸大学 附属学校部長 岡部 恭幸
【ホームカミングデイ・紫陽会賞】	
第15回ホームカミングデイについて	17
第12回紫陽会賞受賞者紹介	17
第11回紫陽会賞受賞者メッセージ	18
学生生活を振り返って	相馬 (徐) 寿明
キノコとの出会い, 環境DNAとの出会い	坂田 雅之
研究は長旅になる, その出発点において	木元めぐみ
【トピックス】	21
1. 2021年度卒業式・学位記授与式「卒業式を終えて」	宮崎 萌加
2. 教育実習事前実習講座	
【OBOG連合会から】	23
神戸大学体育会系公認課外活動団体OBOG会連合会	会長 新垣 恒則
【会員の声】	
各支部から	24
〔東京〕ワインに魅せられて, そしてこれから	松浦 尚子
〔姫路〕人とつながることの真意	三谷 礼子
【会員だより】	26
チョット昔, 神戸大学教育学部に, こんな先生がおられた	玉田 泰之
全ては神大女子寮から始まった!	榛原久仁子
世の中に表現が「ある」を手伝う	那木 萌美
アメリカでの生活	小池 通輝
僕らには空洞が必要だ	太田 光海
多くの課題と格闘中~小学校現場から~	長房 毅
先輩からのメッセージ	中島 (南郷) 晃子・田中雄一郎
【評議員会報告】	
2022年度 評議員会報告・資料	37
2021年度事業報告・2022年度事業計画案	
2021年度基本財産・運用財産 決算報告・2022年度予算案	
2022年度 幹事・評議員一覧	
【事務局から】	40
第14回学部支援金委員会報告・学部支援金へのご協力, お礼	
会員の皆様のご協力・ご支援を	
お悔み申しあげます	
会員寄贈図書一覧	
あじさいの小径 (編集後記)	



コロナを乗り越え新たなスタート

紫陽会 会長 青木 荘一郎

5月上旬、同窓会活動についてをお願いのために近藤国際人間科学部長を鶴甲第2キャンパスに訪ねました。4月から対面での講義が始まり、学生の声キャンパスに戻ってきていました。その時に、学生たちと一緒に学生食堂にならび、久しぶりに食べた昼食のおいしかったこと。学生のざわめきが聞こえるキャンパスは、活気が戻り、訪れた私たちも何か元気になりました。今後、国際人間科学部の特徴的な学修活動であるGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）の海外研修活動も再開すること、紫陽会としてもより現役学生の支援に目を向けていきたいと思えます。

今年度は神戸大学が創立120周年を迎えます。この120周年をステップとして、神戸大学がより発展し、活躍される人材が輩出されることを願います。紫陽会からも、神戸大学の教育・研究活動のさらなる充実を願って、皆様からお預かりしています浄財の中から、評議員会の承認をいただき寄付をさせていただきましたので、ご報告させていただきます。

また、この節目の年に「ONE KOBE」を合言葉に、神戸大学の全学同窓会的支援組織「校友会」の設立準備が進んでいます。この会は、同窓生だけでなく、在校生、保護者、大学職員、その他協力・協賛団体などが一体となって、神戸大学・学生を支援し、また同窓生のつながりも学部横断的により強いものにしていこうとするものです。順調に準備が進めば2023年の4月から発足する予定です。紫陽会も団体会員となりますので、紫陽会会員も自動的に「校友会」の会員となります。神戸大学卒業生としてのアイデンティティを共有し、同窓生としてのつながりを深めていきたいものです。新たに誕生するであろう「校友会」に期待したいと思えます。

さて、足元の本会の活動ですが、今年度もやはり

コロナ禍の影響は大きく、評議員会は中止せざるを得ませんでした。「今年度こそ対面で」と思い、直前まで準備を進めていましたが、第7波の到来により、書面表決の手続きに切り替えさせていただきました。「人と人をつなぐ」というのが同窓会の役割の一つだと考えますが、十分な活動ができなかったのが残念です。来年こそはと強く願わずにはおられません。

この会誌も学部統合に合わせてリニューアルし第3号を数えます。「卒業して何年も経つし、学部の名前も変わって、今の学部の様子がよくわからない」そんな声を、会員の中から時々お聞きします。そこで、今号は特集として「学部・学科紹介」にページを割きました。今号を読んでいただき、「国際人間科学部」への理解を深め、紫陽会会員みんなで学部や現役生を応援する機運がさらに高まればと思います。

最後になりましたが、教育学部1回生で「紫陽会」の設立にご尽力され、第6代会長として本会の発展に力を発揮された鈴木正二郎様が2022年4月19日に91歳でご逝去されました。会長時代には会誌の創刊や、同窓会名簿の作成など、本会の基盤づくりに大きな功績を残されました。あらためて、その功績に感謝するとともにご冥福をお祈りいたします。

多くの先人の皆様の努力の積み重ねの上に紫陽会の今があります。今後も、紫陽会はその思いを大切にしながら、新しい時代に応じた同窓会活動を展開していきたいと思えます。これからも、ご協力よろしくお祈りいたします。



新たな挑戦

神戸大学国際人間科学部 学部長 近藤 徳彦

本年度から国際人間科学部長を拝命いたしました。よろしく、お願いいたします。まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。平成元年(1989年)に教育学部・体育科の助手として赴任し、教育学部・発達科学部を経て、3つ目の国際人間科学部で教育・研究活動をさせてもらっています。専門は応用生理学・環境生理学で汗の研究を主として行っています。神戸大学に赴任させていただいてから、神戸大学の改革の中心を常に経験させていただいたように思いますし、学部・研究科の改変から伝統とは常に考えさせられる状況でした。

さて、神戸大学では本年の4月から対面での授業が中心となり、授業やその他の場面では長期に渡る遠隔授業等のため学生・教員・職員に戸惑いがありました。対面授業も大きな問題もなく、スムーズに進んでいます。大学には、やはり学生の存在が欠かせないことを再認識いたしました。国際人間科学部は、今年3月で2期生を送り出すことができました。この2期生はコロナ禍で各学科の専門を学び、卒業論文を書き上げ、卒業してくれました。予想としては卒業論文のレベルがこれまでと比較して下がるのではと思っていましたが、そんなことはありませんでした。進行は遅れていたようですが、内容は1期生と遜色ないもので、国際人間科学部の学生の実行力の高さを再確認いたしました。このような状況は、本人の努力もそうですが、本学部の教職員のサポート、ご家族の支援、さらに紫陽会の皆様からの変わらぬご支援があったことが大きかったと思っています。この場をかりまして、お礼申し上げます。

国際人間科学部は完成年度を2021年に迎え、新しい段階に入ったように思います。完成年度までは

新しい学部をどのように運営し、学生とともに学んでいくのか、教職員は手探り状態であったように思っています。私自身、発達科学部の学生と国際人間科学部の学生の気質の違いを感じ、どのように対応したらいいのか戸惑った記憶があります。ご存知のように、国際人間科学部ではグローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)を通して学生全員を海外へ派遣しています。しかし、このプログラムの運営はそう簡単ではありませんし、特に、コロナ禍での運営は多くの課題と柔軟な対応の必要性を私達に教えてくれました。また、パンデミックや昨今の世界情勢はこれまでのグローバル化を問い直すいい機会になっています。この経験を踏まえ、学生にはさらにグローバルな視点から社会の課題を俯瞰的にとらえ、解決する能力をさらに養ってもらえるよう、GSPと各学科での教育等に取り組んでいきたいと思っています。

国際人間科学部は様々な学部編成を経て誕生した学部です。それぞれの学部の伝統(理念)を引き継ぐことは難しいですが、これまでの各学部・組織で大切にされてきた、“人間を知りたい...”, は国際人間科学部でも継承されています。伝統を守りながら、新しいことにもチャレンジし、学部の発展に寄与したいと思っています。

卒業生の皆様には、今後もいろいろお願いする機会も出てくると思いますが、引き続き、ご支援のほど、よろしく、お願いいたします。



国際人間科学部長の任期を終えて

神戸大学 国際人間科学部 前学部長 青木 茂 樹

早いもので、紫陽会会員の皆様に学部長退任のご挨拶をすることとなりました。

国際人間科学部は2017年度に新学部として発足し、2020年度に最初の卒業生を送り出しました。この立ち上げ期間の4年間は、大学院の国際文化学研究科と人間発達環境学研究科の運営組織とは別に国際人間科学部の学部長・副学部長を選出しておりましたが、2021年度からは双方の研究科の研究科長が国際人間科学部の学部長と副学部長を務めることとなり、さらに研究科長兼務ではない副学部長を加えた3名での執行体制となりました。

第一期生が4年生となった2020年度より始まった新型コロナの勢いが1年経ってもおさまらない中、前任の櫻井徹先生より学部長を引き継ぎ、新たな執行体制での1年間となりましたが、副学部長の西谷拓哉先生・梅宮弘光先生をはじめとする諸先生方のご協力により、何とか任期を全うすることができました。その間には、青木荘一郎会長をはじめとする紫陽会の皆さま方から多大なご支援をいただき大変感謝しております。

グローバル化が急速に進む世界の中で、さまざまな地球的課題（グローバルイシュー）が発生し深刻化しています。これは新型コロナが始まる以前からの状況で、国際人間科学部は、このような状況にある世界の中で、「深い人間理解と他者への共感」をキーワードとして、多様な人々が共存するグローバル共生社会の実現にむけて貢献する協働型グローバル人材を育成することを目的として発足しました。新型コロナなどの感染症の世界的流行は、それ自身がグローバルイシューの一つであると同時に、他のグローバルイシューを顕在化したり複雑化させており、国際人間科学部が果たすべき役割はますます大きくなっていると言えます。

国際人間科学部では、グローバルイシューを実感し、考察するための海外研修とフィールド学修に取り組むグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）を学科横断の必修科目としています。新型コロナにより海外渡航が困難になって、GSP履修を支援するGSPオフィスでは、オンライン海外研修や国内のフィールド研修で海外研修の代替要素のあるものを強化し、現下の状況で最大限の学修成果が得られるような工夫・努力を続けてきました。海外渡航の条件が緩和され始めたことに伴い、各種の条件をクリアしながら学生の海外渡航を着実に回復させつつあります。

その一方で、2022年にはロシアによるウクライナへの侵攻が始まり、近隣諸国・関係国を巻き込んで軋轢・緊張が高まる事態となってしまいました。事態の打開が誰にも見通せない中であらためて思いましたのは、結局のところ、個人と個人の間関係から信頼関係を築いて、そのような細かいネットワークを束ねることで太く、強く醸成して行くことが、時間はかかるでしょうが地道に進めるべきことなのか、ということです。そのような草の根のネットワークの種を蒔くという意味からも、GSPをはじめとする国際人間科学部の取り組みの意義は小さくないと考えております。

紫陽会会員の皆さまには、今後とも国際人間科学部に対するご支援とご鞭撻をお願いいたします。1年間という短い任期ではありましたが、有難うございました。


 学科紹介 グローバル文化学科

地球大の共存・共生社会をめざして

グローバル文化学科は国際人間科学部の中で唯一、鶴甲第一キャンパスにあります。定員は一学年140名です。本学科では、国境や文化の垣根をはじめ様々な境界を乗り越えるグローバル共生社会の実現のため、高度な外国語の運用能力とICT教育に基づく情報分析力や発信力を駆使し、異文化間のコミュニケーションと相互理解を率先して推し進めること、ひいては多文化状況、文化交流、文化摩擦等をめぐる地球規模の課題の解決への道筋を社会に発信する能力を持つ人材を養成することを目指しています。そのために、「地域文化系」、「異文化コミュニケーション系」「現代文化システム系」「言語情報コミュニケーション系」という4つの教育研究の柱（プログラム）を置き、様々な切り口から現代世界の諸問題＝グローバルイシューを解決する糸口を模

グローバル文化学科長 貞好康志
索していきます。

他学科と同様、この3年ほどはコロナ禍に翻弄され、ほとんどの海外学修プログラムをオンラインで行なうことを余儀なくされましたが、本年度初め以降、本学部生たちが久しぶりにリアルの留学に旅立っていきつつあります。その大多数を実は本学科生が占めています。前身の国際文化学部の時代から、中長期の海外留学に赴く学生の割合が高いことが本学科の特徴でした。そのDNAを確認できた思いです。むろん留学以外にも多彩な海外研修や国内フィールドワークの選択肢が用意されています。コロナに限らず、様々なリスクに周到な備えをしながら、学生諸君のグローバルな学びを今後とも学部・学科をあげて支援してゆきたいと思えます。

グローバル文化学科だからこそ得られた経験

グローバル文化学科は、「興味の幅を広げ、国際的な視点からそれを深めることができる学科である」と感じます。それは、カリキュラムは勿論のこと、多様な専門を持ち熱心に指導して下さる教授陣や様々な関心事を持つ仲間と出会えること、留学生との交流機会が多く存在することが理由です。

私個人を振り返ると、4年間で様々な経験を積み、自身の関心事を深めることができました。入学当初は高校までの少ない経験をもとに、漠然と「途上国支援に関わりたい」と考えていたものの、授業で「途上国」という概念そのものから考え直す機会があり、自身の視野の狭さを痛感しました。その為、「自分が学びたいと思っていること」にこだわらず、広く様々なことを勉強するように努めた結果、入学当初は想像もしていなかった「観光」や「地域活性化」について学修を深めることになりました。具体的に

グローバル文化学科 4年生 長谷川 舞 香
は、現在グローバル文化学科が連携を深め、GSPのプログラムも実施されている京都府南丹市美山町での活動やイタリアへの交換留学の準備、海外学生との共同プロジェクトや日本文化についてのGSPへの参加が挙げられます。

2年次から4年次にかけては、コロナ禍で留学が中止になるなど、学びの幅が制限されて辛い時期もありました。しかしその中でも、比較的早く気持ちを切り替え、コロナ禍の日本だからこそできる経験を積むことができました。それは、海外での挑戦を応援して下さる教授や海外交流の窓口を多く用意して学生の学習環境をサポートして下さったGSPオフィスの方々、そして国際的な視野を持つ仲間にも恵まれたためだと考えています。

海外渡航が可能になった4年生の夏には、コロナ禍中の取り組みをもとに、2ヶ月弱のヨーロッパ渡

航を決断しました。イタリアで自身の関心事であるアグリツーリズムのインターンシップに参加したり、神戸大学で友達になった留学生と再会したりと充実した日々を送ることができました。卒業論文は、地域活性化と訪日外国人旅行者の関係性について執筆予定であり、卒業後の進路として、訪日外国人旅行者へのプロモーション活動などを行う組織で勤める予定です。本学科で得た様々な経験を元に、今後も多様なことに興味を持ち、学びを深めながら社会に貢献しようと考えています。



スペイン・モンセラート山にて 2019年度交換留学生と

発達コミュニティ学科

魅力ある5つのプログラム

本年度より学科長を担当しております岸本です。発達コミュニティ学科では人間の発達とそれを支えるコミュニティの実現に取り組む人材養成に取り組んでいます。当学科には大きく2本の柱があります。一つは「発達基礎」です。そこでは人間の心理的・身体的発達、表現や行動の機能発達など生涯全般に課題解決を行うために必要な基礎教育を行います。もう一つは「コミュニティ形成」です。その多様な発達の相互関係に着眼し、グローバル社会と個人をつなぐコミュニティに関する理論の構築と実践的な問題解決を行うために必要な専門教育を行っています。

やや硬い文章ともなりましたが、発達コミュニティ学科の魅力は何よりもその分野の広さにあり、5つのプログラムにより構成されています。それは「社会エンパワメントプログラム」「心の探究プログラム」「アクティブライフプログラム」「ミュージックコミュニケーションプログラム」「アートコミュニケーションプログラム」です。一見するとバラバラとした印象もあるかも知れません。しかしながら、心理と身体、表現や行動、更にそれを取り巻く環境や社会は、決して切り離せるものではなく、有機的な「つながり」を有しているのです。

発達コミュニティ学科長 岸本吉弘



写真①

さて、ここで1年生の必修授業である「発達コミュニティ概論」を紹介させていただきます。

この授業は様々な分野の教員が「発達」「コミュニティ」をキーワードにオムニバス展開をし、教員シンポジウムも開催し、更に授業終盤には履修生全員が主体となり「学生シンポジウム」を運営・開催するというユニークなものです。

写真①は授業冒頭の導入で実践した「表現パフォーマンス」で、美術や音楽の教員が軸となり学生達も巻き込む形で実施した即興コラボレーションです。体育館で8mサイズの大きな紙を用意し、美術や音楽が織り成す即興的で緊張感のある展開に、学生たちも引き込まれています。そこでは言葉では

ないコミュニケーションが図られます。

そして写真②は「学生シンポジウム」の様子です。学生達が当学科に関わる一つのテーマを選定し準備を重ねながらも、自由闊達に議論を展開しています。学科の創設以降、例年盛り上がりを見せている授業となります。

これはほんの一例ですが、このように多様な専門性が関係性を結ぶのが本学科の何よりの特徴です。



写真②

発達コミュニティ学科の魅力とGSPプログラムでの学び

私は現在「心の探究プログラム」に所属しています。この学科で学んできた4年間およびGSPプログラムでの経験を通して、魅力的だと感じた部分についてご紹介したいと思います。

この学科の一番の魅力は、学生一人一人の個性を尊重する環境が整っていることだと思います。この学科では約半数の学生を美術やスポーツ、音楽等の実技を含んだ入試方式で募集しており、勉学以外にも多様な経歴を持った学生たちが在籍しています。一般入試で入学した私は最初こそこのような多様性に戸惑ったものの、友人たちが各々のスキルを活かしてスポーツや音楽に励んでいたりと、コンサートなどを自主的に企画したりする様子を見て、今では周りから沢山の刺激を受けられるこの環境にとっても感謝しています。

そしてあらゆる分野の授業を所属プログラムに関



写真①

発達コミュニティ学科4回生 大 家 舞
わらず自由に履修できるのも魅力の一つです。人間の発達とそれを取りまくコミュニティについて学ぶという一貫した目的のなかでも、心理学やスポーツ、芸術といった多様なアプローチを知れたことは自分の視野を広げる上でとても役に立ちました。

また私はGSPプログラムを通して、これまで外国にルーツをもつ子どもを対象とした学習支援ボランティアと、韓国での文化研修に参加しました。研修後、それまで曖昧だった自分の関心が外国人への差別意識にあることに気づかされ、その後、卒業研究のテーマを選択する上でもこの経験が大きな助けとなりました。GSPでは特定のコミュニティに実際に飛び込み、その一員として活動できるようなプログラムが用意されているため、興味のある 이슈に対してより当事者に近い観点を得やすく、関心を具体化・明確化できることが魅力だと思います。



写真②

現在私は韓国に交換留学をしています（写真①②）。当初コロナ禍で留学をためらっていたのですが、やはりGSPを通して一度韓国生活を経験していたことがこの留学を決断する大きな後押しになりました。また現在まで充実した留学生活を送ることが

できているのも、GSPオフィスを始め学科の職員の方々のサポートと、学科では珍しい長期の留学を応援してくれる友人たちのおかげだと思っています。この環境に感謝して残りの大学生生活も一生懸命取り組みたいと思います。

環境共生学科

時代を担う環境共生学科と新しい学生たち

紫陽会の皆様には日頃から物心両面のご支援を賜り、深く感謝申し上げますとともに、こうした諸先輩方とのつながりで現在の研究教育が実現しているものと身を引き締めております。

環境共生学科の概略につきましては学部広報等で公開されておりますので、ここでは学科の実際の雰囲気について少しご紹介したいと思います。当学科は自然科学、生活科学、数理情報科学、社会科学を学問基盤とする4つの教育プログラムから構成される文理融合の学びの場です。学生は2年次にいずれかのプログラムを選択し専門性を高めていきます。こうした制度は発達科学部人間環境学科の時と基本的に変わりません。ところが新しい学部、新しい学科になって以来、学ぶ学生に大きな変化が見られるようになりました。かつては文理融合を掲げながらも、学生は例えば数理情報といった一つの専門を選択すれば他の分野への関心を失う傾向が強くなりました。しかし、新学科の学生は数理情報プログラムに属しながらも社会科学系科目を積極的に受講するなど所属プログラムを超えた学びと交友関係を求める学生が増えてきました。授業履修要件を柔軟化したことも大きな要因ではありますが、とても喜ばしいことと思われま。なぜなら、複雑化する世の中で生じる諸問題や課題は、限られた学問知見や単純な思考では対処できず、多角的な視点と柔軟な発想が強く求められているからです。狭い専門性に縛られず広い視野と知見から課題にアプローチしようとする環境共生学科の学生らの姿勢はまさしくこれか

環境共生学科長 太田和宏
ら時代が強く求める資質に合致したのもあるわけです。実際、より自由な発想をする意欲的な学生が増えてきたように感じています。新しい学部、学科に模様替えしたことの大きな効果だといえます。

もちろん一方で課題がないわけではありません。幅広い学習や関心の多様化は総合的思考力を養うには重要である反面、近年さらに高度化する専門知識、技量、知見を身に着けるには、その分野に集中してじっくりと体系的に学ぶ必要があります。これらをどのように両立させるのかは大きな課題です。しかし、近年学科教員も、より厳しい研究環境で能力を研ぎ澄ませてきた若いスタッフが増えて参りました。多くの若い教員の研究・教育に対する熱意が学科に新しい風を吹きこんでいるのも事実です。過去を知る古参スタッフと新鮮な若い力とが手を携えながら課題に取り組み、新しい時代に即した大学と環境共生学科の内実をひとつひとつ作りあげていくのではないかと楽観しております。

同窓生の皆様におかれましては、成果と課題を抱えながら変化してゆく環境共生学科と、もちろん国際人間科学部を、寛仁なる心でお見守りいただき、同時にご叱咤いただけましたら、学生、スタッフの励みになります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

環境共生学科での研究室生活

私は環境共生学科の4回生で、現在卒業研究に取り組んでいます。ここでは、主に研究活動の経験に基づき、環境共生学科生のキャンパスライフを紹介します。

研究活動が本格的に始まったのは3回生の春です。私は、環境DNA手法の発展と実用に取り組んでいる源研究室を選びました。環境DNA手法とは、水や土壌などに存在する生物由来のDNAを抽出して解析することによって、生物の分布状況を推測できる手法です。私の卒業研究では、この手法を用いて、夜間の人工的な光照射が魚の生態に影響を及ぼしているのかを調査しています。源研究室での研究活動にはとても満足していて、中でも特に3つのことを魅力に感じています。

第一に、フィールドワークをする機会が多いことです。研究室には、毎月定期的にフィールドに出かけてサンプルを採取している人や、船や潜水艦に乗って調査に出かけている人がいます。フィールドは、川や湖、山の中のため池などが多いです。そのため、自然の中で研究活動をしたいという人にはうってつけだと思います。

第二の魅力は、先進的な技術を使えることです。環境DNA手法の解析には、どんどん開発されていく機械や分析方法を駆使します。日々科学の進歩を感じられる点が魅力です。

第三の魅力は、興味のあることにどんどんと挑戦する機会をいただけることです。私は人間活動が生態系に与える影響について研究したいと考えていま

環境共生学科4回生 **大藪 愛 紗**

した。特に光害（電灯などの人工的な光が環境に及ぼす意図しない悪影響）に興味を持っていました。これを先生にお話ししたところ、このテーマで卒業研究をすることが可能になりました。さらに、私は一ヶ月後に学会でのポスター発表を控えています。これは、研究活動の成果をどこかで発表したいと考えていた私に、先生が学会での発表を勧めてくださったためです。また、研究室の同期には、4ヶ月間、研究活動のためにタイに留学している人もいます。このように、学生が興味のあることに積極的にチャレンジできる環境が整っていることが魅力的だと感じます。

環境共生学科での学生生活も残すところあと半年になりました。これからは、研究のまとめを行い、充実したキャンパスライフにふさわしい卒論を仕上げたいと思います。



源研での一コマ（写真提供 木原菜摘氏）

子ども教育学科

人を大切にするとともに

子ども教育学科は、グローバルな視野から、学校がかかえる課題を多面的に認識し、実践的に解決していく能力を身に付けた初等教員等を養成すること

子ども教育学科長 **木下 孝 司** を目指しています。教育学部の伝統を引き継ぎ、子どもを発達の理解する視点を重視した教育研究体制を大切にしています。

学生は、2年次より乳幼児教育学コースと学校教育学コースに分かれますが、コースの垣根はなく、学科は一体的に運営されています。カリキュラムでは、1年次より「観察実習」で、神戸市立の幼稚園、小学校を訪問し、実践現場から学ぶ機会を保障しています。

本学科の学生は、教育現場での実習と学部独自科目のGSPをともに履修する必要があります。新学部設立当初、学生の負担が、増えることに不安がありました。しかしながら、GSPを通して、多様な視点を学ぶことによって、子どもや教育に関する理解の幅が広がるという相乗効果があるように思われます。

学科の定員は1学年50名という少人数です。本学科学生は、人を大切に、思いやる気持ちの高い

人たちであり、私たち教員はそうした学生に支えられています。コロナ禍のもと、オンラインが続く中であっても、自主的にZOOMを使って相互につながる場を設けていました。また、上級生たちが、いろいろな情報ツールを活用して、入学式前に、新入生に呼びかけて、顔合わせ会や相談会を企画するということもありました。こうした自主的な取り組みをする学生を頼もしく感じています。

1期生の進路としては、4割程度が教職（保育職も含む）に就き、5割程度が民間企業と公務員、1割が大学院進学という状況でした。どの卒業者も、人を大切にする視点から、いろいろな立場で人を育てていく役割を果たしていくことに期待しています。

子ども教育学科で学んだこと

子ども教育学科4回生 畠山 いぶき

お人柄に触れることができたり、意外な一面を知ることができたりするのも、少人数だからこそだと思います。

私は学校教育学コースに所属し、公立小学校の教員を志望しています。この夏には教員採用試験を受験し、結果を待っている最中なのですが、教員採用試験の勉強をする際にも、子ども教育学科の仲間たちに支えられました。教員を目指す学生が自主的に開催している勉強会に参加して、教員採用試験に関する情報を交換したり面接対策をしたりすることができただけでなく、愚痴を言い合ったり励まし合ったりすることを通して精神的に楽になりました。このような仲間に出会えたことに感謝しています。

教員採用試験に合格することができたら、一人ひとりの子どもの良さを認めて伸ばすことのできる教師になれるよう、子ども教育学科で学んだことを大切にしながら、卒業後も学び続けていきたいです。

子ども教育学科の魅力は、実践と理論の融合にあると思います。本実習以外にも、「観察実習」や「学校インターンシップ」など、学校現場を肌で感じる機会が多く、実際に実践する姿をイメージしながら、大学で学んだ理論を深めることができました。さらに、附属の学校園では、様々な研究開発が行なわれており、先進的な実践研究を間近で目にするのができ、勉強になります。GSPでは、外国にルーツを持つ子どもに対する学習支援プログラムに参加し、多文化教育の重要性について学びました。他の教員養成系大学では体験できないようなプログラムを通して、視野を広げることができました。

子ども教育学科のもう一つの魅力は、少人数教育です。少人数であるため、学科の学生は顔見知りです。講義や演習を通じた付き合いのみならず、ちょっとした相談が気軽にできる人間関係を築くことができます。先生方との距離感も近く、親身になってご指導くださいます。雑談などを通して、先生方の

コロナ禍におけるGSP運営

まず初めに、グローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）への多大なご支援について、紫陽会の皆様には感謝申し上げます。特に、令和3年（2021年）より「紫陽会グローバル人材育成支援基金」から、GSPで海外研修を実施する学生への金銭的な支援が可能となりました。残念ながら、コロナ禍の状況においては、これまでのように多くの学生を海外研修に送り出せていませんが、それでも、2022年度には3名の学生に支援を実施することができました。今後、世界各国における出入国制限が緩和されるに従い、海外研修を実施する学生の増加が見込まれており、本基金が多くの学生の助けになると期待しています。紫陽会のこれまでのご支援に重ねて感謝申し上げますとともに、今後も引き続き、変わらぬご支援を頂きますようお願い申し上げます。

さて、様々な研究・教育がグローバルな視点や関わりを欠くことができなくなっている今日、体験を通して、学生にグローバルな視点や関わりについて学ぶ機会を提供するGSPはその重要性を増してきています。そんな中、2019年末に始まった新型コロナウイルス感染症による世界各国における出入国制限は、交換留学や海外研修といった、実際に海外に足を運び現地で学ぶという機会を奪うものでした。

GSPオフィス室長 村尾 元
しかし、GSPオフィスのコーディネータ教員をはじめとする国際人間科学部の先生のご苦勞によって、多くのオンラインを活用したプログラムが開発され、コロナ禍においても、なんとかGSPを運営することができました。

この2年間に渡るコロナ禍における経験は、我々GSPオフィスの教員にとって、GSPにおけるICT活用の可能性と限界を知る機会となりました。オンラインを活用することで、時間や空間に捉われずにプログラムを実施できるという利点がある一方で、どちらが良いというわけではなく、やはり、現地に行ったり実際に会ったりするのは体験が異なるということも分かりました。今後は、この経験を活かし、利点と欠点を踏まえた上でICTを活用した新たなグローバル体験の提供を行えるプログラムの開発を進めたいと考えています。

奇しくも、今回、GSP体験談を寄稿して下さったのは、オンライン交換留学を行った学生1名と、現地での海外研修を実施した学生1名です。それぞれにコロナ禍による制限を受けた中でのGSPとなりましたが、学生が何を体験し、何を感じたのか、少しだけ共有していただければと思います。

違いを楽しむ，人と関わる

海外実習3回、1年の交換留学を経験したが、大きな目標を抱いていたわけではない。自らの好奇心に従い、未知の世界を知るために海外に足を運んだ。ウガンダ、インドネシア、マレーシアではその混沌とした環境が楽しくて仕方なかった。私にとって、非日常に出会える場所が海外であった。違いを受容することへの抵抗がなくなり、異文化の人々との生活に魅了されて海外生活をしたいと思い、交換

環境共生学科4回生 生水口 翼
留学を決めた。

コロナの影響で社会は一変したが、私は有意義な時間を過ごすことができた。そもそも大学から曖昧な帰国指示が出たのだが、多くの人の助けを得て滞在の継続が可能となった。コロナ禍での留学は行動が制限され無意味だという人もいるだろうが、私は運よく有意義な生活になった。それは娯楽の少ない制限された生活の中でも、日常を色鮮やかにしよう

と奔走した友人たちのおかげだ。ほとんど寮の中で過ごしたからこそ、そこでの親密な関係が今もなお続いている。昨夏には2ヶ月かけて欧州の友人たちと再会し、その日常にお邪魔させてもらった。おかしな話だが、パンデミックのおかげで多くの友人を得ることができ、以前にも増して人との関わりが大好きになった。

これまでの海外経験を一つの成果にしたいと思い、卒論では以前から興味があった異文化やその日常を題材とした、グラーツのトルコ系移民のケバブレストランが、移民の統合の象徴になり得るのかを現地調査をもとに論じた。私は晴れて日本における

ケバブ研究の第一人者になったのだ。このように全く関係のないような海外経験が卒業する頃には繋がりを持っていた。

ここに書いたことは海外経験ほんの一部であり、濃密な経験を通して、いまだに綺麗にまとめられない感情を抱いている。「違いを楽しむこと、生きる上での人との関わり的重要性」そんな単純なことしか明確に自分に落としこめていないが、私に大きな影響を与えている。今後の人生で、留学経験がどのように生きてくるのか楽しみでたまらない。貴重な体験を支えてくれた方々に心から感謝する。



帰国当日、オーストリアの友人たちと共に



インドネシアの海の上の家にて

コロナ禍の留学

大学入学時から海外留学を行いたいと考え、できるだけ早く海外に行けるように、2年次から1年間の交換留学に行けるような計画を立てていました。しかし、コロナの影響で海外渡航は難しくなり、オンライン留学という選択肢しか残されていない中で、オンラインでの交換留学に挑むことを決意しました。参加してみると、オンライン特有の昼夜逆転の生活やコミュニケーションの取りづらさはありましたが、神戸大学の授業を併用して取れたり、オンラインでも友達を作れたりと楽しいこともたくさんありました。初めは、オンラインが普及しているこ

グローバル文化学科4年生 **生駒 芙美乃 ばある**
 の社会の中で、無料の映像サービスで海外大学の授業を見るのとどれほど違うのかということが懸念点でした。しかし、実際に参加してみると、大学生として参加していないと分からないような英語での履修登録の難しさや、教授と積極的にコミュニケーションを取らなければいけない大変さなどを体感し、映像コンテンツをただ受容しているのとは全く違うということが理解できました。オンライン留学を経験して、残りの在学期間が少ない中でできるだけこの環境を利用しようと、テネシー大学との交流を行うプログラムに参加しました。このプログラム

では、オンライン上のゲームのようなプラットフォームを利用して、Zoomなどのオンラインミーティングとはちょっと違ったオンラインでの文化交流を楽しむことができました。日本とアメリカの文化や習慣の違いを共有できただけでなく、参加していた他の日本の大学生とも、英語でお互いの大学の文化に関する違いを共有できたことも興味深かったことの一つです。コロナ禍にたくさんのオンラインプログラムが開講されたことで、この環境をうまく利用できたと考えています。これからも、今しかできないことをしようとする気持ちを大切に、強い行動力を持つようと思えるような体験でした。



テネシー大へのオンライン交換留学の関係で
在大阪・神戸米国総領事館を訪問した際の写真
前列一番右が生駒さん
写真提供：在大阪・神戸米国総領事館

神戸大学附属学校園の現状

神戸大学附属学校部長 岡部 恭幸

神戸大学には、現在、幼稚園、小学校、中等教育学校、特別支援学校の四つの附属学校園が設置されています。附属学校部は、それらの運営を統括するとともに、神戸大学の全研究科・学部等との連携を推進することを目的として、附属学校園が発達科学

部の附属から全学の附属に移行した平成21年度に設置されました。

そして、平成21年度から他の国立大学に先駆けて「附属学校再編計画」に取り組んできました。令和2年度に完成年度を迎えております。神戸大学附



附属幼稚園



附属小学校



附属中等教育学校



附属特別支援学校

属学校再編計画とは、それまでの組織であった神戸大学発達科学部附属住吉小学校・附属明石小学校の2校を神戸大学附属小学校1校に統合するとともに、神戸大学発達科学部附属住吉中学校・附属明石中学校の2校を神戸大学附属中等教育学校1校に統合・発展させました。この再編によって、再編前と比較して、学校規模（学級数及び定員）でおおむね3分の2程度に、教員数でおおむね6分の5程度に

それぞれ縮小しております。その結果、初等・中等教育における全ての学校種（幼稚園、小学校、中学校、高等学校）に加え、特別支援学校を有することとなり、このようにすべての校種の附属学校を持つ国立の総合大学は全国でも少数であり、その中でも中高一貫校（中等教育学校）をも有しているのは全国で本学のみであります。

近年の附属学校園の教育と研究の成果は以下のとおりです。継続した意欲的な取り組みを通して学校創りを行い、その教育は園児・児童・生徒、保護者からもその成果は高く評価されています。また、神戸大学の学生を中心とした教育実習も広く受け入れ、行っています。

- 附属幼稚園及び小学校が文部科学省研究開発学校の指定を受け、文部科学省及び全国の有識者からの指導助言を踏まえ神戸大学（主に人間発達環境学研究科）と連携して幼稚園教育と小学校教育の一体化に関する研究を平成31年度まで継続して進めた。
- 附属特別支援学校にインクルーシブ教育の具現化と特別支援教育の機能向上を図るために「特別支援教育発達研究センター」を平成28年に設置して研究・教育を進めた。
- 附属中等教育学校が文部科学省研究開発学校の指定を受け、文部科学省及び全国の有識者からの指導助言を踏まえた地理・歴史科の新科目に関する研究を令和2年度まで継続して進めた。
- 平成30年から附属小学校が国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構の委託事業「マノスク国際学校教育環境改善のための調査」を受託し、大学と連携しながら教諭1名をフランスのマノスク国際学校に派遣し、現地児童の状況調査及び附属小学校での知見をもとに授業を実施、さらにそれを通じた改善計画の提案などを平成31年度まで行った。
- 附属中等教育学校が「生涯を通じて新たな価値を創造し続ける文理融合型人材の育成－Education

for 2070－」を研究開発課題として、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けたことにより、神戸大学の各研究科と連携しながら先進的な理数系教育を進め、将来的に国際的に活躍しうる科学技術人材の育成を図る研究を開始した（令和6（2024）年度まで）。

- 附属小学校の学年担任制等の改革を含む実践的な取組「神大附属発！真・働き方改革～教師を支える6つの仕組み」が独立行政法人教職員支援機構令和3年度表彰事業第5回NITS大賞において「子供一人一人が輝ける場となるように～教師の働きがいを再構築する学校づくり～」で準大賞を受賞した。
- 地域貢献として、各附属校園において、公開授業、研修講座及び教育研究発表会等を開催しており、地域並びに全国の教育の発展に寄与している。参加者は、幼・小・中・高・特支の教員、教育委員会関係者及び大学の教員を中心に、3年間（平成29～令和元年）で延べ4,600名以上となっている。また、神戸市並びに播磨地区を中心に近隣の学校や地域の要請に応じて、各校種の附属校園の教員が講師を務めている。
- 附属特別支援学校（明石市）において、障害幼児とその保護者を対象として親子教室（たんぽぽ教室）を、継続的に開催している。親子での集団あそびや校内での自由あそび、子育て相談や就学相談を通して、発達につまずきのある（またはその疑いのある）幼児の保護者に対して、地域における就学前障害児の療育と教育相談を行っており、参加者は3年間で約520名を数えている。

第15回神戸大学ホームカミングデイ

2021年10月30日（土）に開催された第15回ホームカミングデイは、コロナウイルスの感染状況を考慮し、記念式典ならびに学部企画ともに「オンライン形式」で実施されました。記念式典においては、藤澤正人学長の挨拶に引き続き、記念講演として元NHKアナウンサーの住田功一氏が「阪神・淡路大震災を若い世代に語り継ぐ」と題して、大震災当時の取材経験をもとに、生命や人のつながりの尊さなど次世代につなぎたい思いを熱く語られました。

午後の学部企画では、旧教育・発達科学部，旧国際文化学部とともに現役学生が，コロナ禍の中での学修活動や生活について生の声で伝えてくれました。



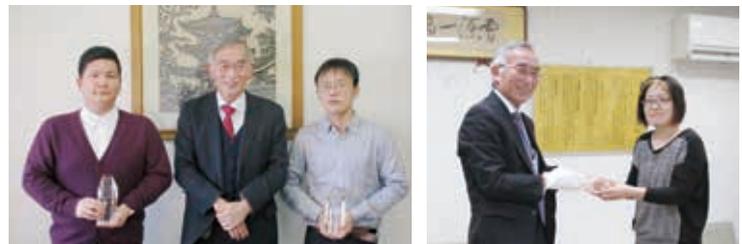
レイバンズ・チアによるパフォーマンス

第11回紫陽会賞

例年，ホームカミングデイの学部企画の中で行われていました「紫陽会賞」授与式ですが，今回もコロナウイルス感染拡大防止のため実施できませんでした。受賞された準会員3名（相馬（徐）寿明氏・坂田雅之氏・木元めぐみ氏）の方には，紫陽会会長から個々にメモリアルクリスタルと副賞をお渡ししました。

受賞者3名の方には，本会誌にそれぞれの歩んでこられた道や研究活動について寄稿いただいています。若き研究者の皆様の今後のさらなる活躍を祈念いたします。

第11回紫陽会賞受賞者



坂田氏

相馬氏

木元氏

第12回紫陽会賞受賞者紹介（第16回神戸大学ホームカミングデイで授与式を実施予定）

ウォーリー木下 氏（1993年 神戸大学教育学部卒業）

在学中に劇団☆世界一団を結成。現在はSunday（劇団☆世界一団を改称）の代表で，全ての作品の作・演出を担当している。2003年には，映像や音楽を取り入れた言葉を発しないノンバーバルパフォーマンス集団 THE ORIGINAL TEMPO のプロデュースを行い，エジンバラ演劇祭にて五つ星を獲得。手掛ける作品はジャンルレスで，ノンバーバル，ストレートプレイ，ミュージカル，2.5次元舞台と多岐にわたる。（神戸大学広報誌「風」18号より）

2021年には，東京2020パラリンピック大会の開会式のメイン・ディレクターを務め，その演出は世界的に大きな感動を呼んだ。広い世界に力強く羽ばたこうとする少女の姿は，記憶にも新しいところである。

紫陽会賞候補者推薦のお願い

学術研究，スポーツ・芸術などの文化活動，社会貢献活動などにおいて顕著な功績を残されている会員，準会員の功績をたたえ，さらに今後の活躍を祈念するために設けられた紫陽会賞も今年度で第12回を迎えました。候補者については，事務局で毎年，情報収集していますが，会員の皆様からも，会員の活躍情報を提供いただければ嬉しいです。どうぞよろしく願いいたします。

第11回紫陽会賞受賞者メッセージ

学生生活を振り返って

相馬 (徐) 寿明

神戸大学発達科学部人間環境学科 2016 (平成28) 年卒
 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程前期課程 2018 (平成30) 年修了
 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程 2021 (令和3) 年修了

学部4回生で研究室に所属してから今日まで、環境DNA技術に関する研究に一貫して取り組んできました。環境DNAとは、一言で表わせば「DNA情報として残された生き物の痕跡」です。例えば魚なら、排泄物や粘液などの形で自らのDNAを常に水中に放出していると考えられています(他の生き物でも同様に、皮膚や毛、唾液や汗など)。こうした環境中にDNAとして存在する生き物の痕跡をまとめて環境DNAと呼びます。人間活動の影響などにより、地球上から多くの生き物が(私たちの知らない間に)その姿を消しつつある昨今、生物多様性の保全は私たち人類にとって非常に重要なテーマです。環境DNA技術では、水を汲み、その中に含まれるDNAを調べることで生き物の分布を手軽に推測できるので、捕獲や目視などの従来手法よりも広範かつ迅速に生き物の分布を推測することができます。加えて、生き物や生息地へのダメージもほとんど無く、似た外見の生き物もDNA情報から識別できます。現在、社会実装に向けた技術開発が国内外で繰り広げられており、最近では理科の教科書にも取り上げられ始めました。

私が環境DNA技術と出会ったのは、入学して半年後、日本での環境DNA研究のパイオニアである源利文特命助教(当時、現教授)が本学に着任されたことがきっかけでした。氏の話聞き、「水を汲むだけの生物調査なんてそんな上手い話あるんかいな」と思いながら、「何だか面白そうかも」とも思い、あまり深く考えずにこの研究室を選んだことを覚えています。文系入学で数学・理科系の教養に圧倒的に乏しかった私にとって、この選択が茨の道であることは、卒業研究が始まって割とすぐに痛いほど思い知らされました。PCR法の原理が分からない、モル計算が分からない、統計が分からない。ただでさ

え分からないことだらけな上に、人見知りな性格が災いして、周囲に自分から助けを求めることもできず、非常に困りました。それでもなお、源さんを始めここには書ききれないくらいたくさんの人たちの助けのおかげで、何とか研究を進めることができました。その後、教員免許を取得するために大学院に進学したものの、そのまま博士号まで取得してしまい、今ではこれが仕事になりました。入学当時の自分には全くもって想定できなかった現在ですが、一度しかない人生の一部を「研究者」として過ごすのも悪くない気もしています。

入学時点で特に好きなこと、やりたいことのない学生は少なくないと思います。ただ、興奮できるきっかけに時々巡り合うことがあります。それを逃さず、まさに反射神経でとりあえず掴んでみて下さい。そうすれば、何か道が拓けるかもしれません。あと、「安易な理転は危険」「周りには頼れるだけ頼る」この2点と共に、本稿を終えたいと思います。最後になりましたが、紫陽会賞を賜り誠にありがとうございました。

キノコとの出会い、環境DNAとの出会い

坂田 雅之

神戸大学発達科学部人間環境学科 2016 (平成28) 年卒
 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程前期 2018 (平成30) 年修了
 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期 2021 (令和3) 年修了

2010年7月16日、当時高校2年生の私は六甲山でとあるキノコに出会いました。ワカクサウラベニタケというそのキノコは美しい緑色で、歩道から少し奥まった日陰で遠目に見つけた時は花と見間違ふかのようでした。そのキノコとの出会いがきっかけとなり、キノコに関する研究に携わるようになり、それを利用して当時ではまだ珍しかったAO入試で神戸大学発達科学部人間環境学科に入学し、学部、修士、博士と計9年もの間、神戸大学の鶴甲第二キャンパスで学生時代を過ごしました。

入学当初は、引き続きキノコに関する研究ができればいいな、と漠然とした考えでとりあえず興味のある生物系・生態学に関する授業を優先して履修

し、自分の好きな科目を学べる大学という環境を満喫していました。そんな中、後の師となる源利文先生が発達科学部に着任され、私が属していたサークルの先輩がその研究室生第1号として所属されました。その先輩から「環境DNA分析」なる最新のトピックに関するお話を聞き、「環境DNA」に出会いました。そして研究室配属前から調査にも同行させていただき、「環境DNA分析」への興味が高まっていきました。一方で漠然としたキノコへの思いもあったのですが、先輩が「最近環境DNAで『どじょう』をやりはじめた」というお話を聞き、「『土壌』のDNA→土からキノコのDNA調べて何かできるかも」という短絡的な考えから環境DNAに関わることを決意しました。なお、後にこの時の『どじょう』は『土壌』ではなく、魚の『ドジョウ』であることが判明します。しかし、嘘から出た実、ではありませんが、研究室に入って以来、土を扱った環境DNA分析に関する研究に携わっています。

私は、当時も今も一般的な環境DNA分析手法である池や川、海の水を利用して、その中に含まれている生物のDNA（＝環境DNA）を調べるという方法ではなく、池などのそこに溜まった泥（堆積物）を利用してそこから現在や過去の生物の情報を得るという、少し違う観点からの環境DNAに関する研究を主に行ってきました。生物から放出されたDNAが堆積物中に蓄積・保存するため、過去の堆積物を用いて環境DNA分析を行うことで、過去に遡って生物の情報を得ることができます。これはとてもロマンあふれることだと思っており、楽しく研究活動を行っております。

ワカクサウラベニタケに出会ってから約12年、環境DNAに出会ってから約9年、生態学に携わり、現在も研究を続けていられるのも、自分の好きなことをやってきた結果なのではないかと考えています。もちろん、好きなことをやっていく上で支えてくださった方々、指導してくださった方々には感謝してもしきれません。そして、自分の好きなことを見つけ出し、突き詰めてこられたのは発達科学部という自由度の高いカリキュラムを持つ地盤があったからであると思います。このような環境はかけがえ

のない素晴らしいものだと思っております。

私は現在も湖沼で堆積物コアをとり（写真参照）、時を越えた生物情報を集め研究活動を続けられています。この度賜りました紫陽会賞についても、このような研究に関して頂きました。とても光栄に存じます。



福井県の水月湖での堆積物コアサンプリングの様子
2022年8月

研究は長旅になる、その出発点において

木元 めぐみ

ニューカッスル大学大学院	2009（平成21）年修了
国際教養大学専門職大学院	2012（平成24）年修了
神戸大学国際文化学研究科	2021（令和3）年修了

私はグローバル教育で有名な教育機関で学び、本学入学前は外国人に日本語を教える仕事をしていました。政府の派遣プログラムでモスクワの大学に勤めた間、発音や話し方の指導をした時に出た疑問から、日本語の声の仕組みを深く知るために本学で研究をすることになりました。日本語教育では、単語のアクセント（例えば「飴」と「雨」のような違い）と話し声全体にかかるイントネーションを教えま



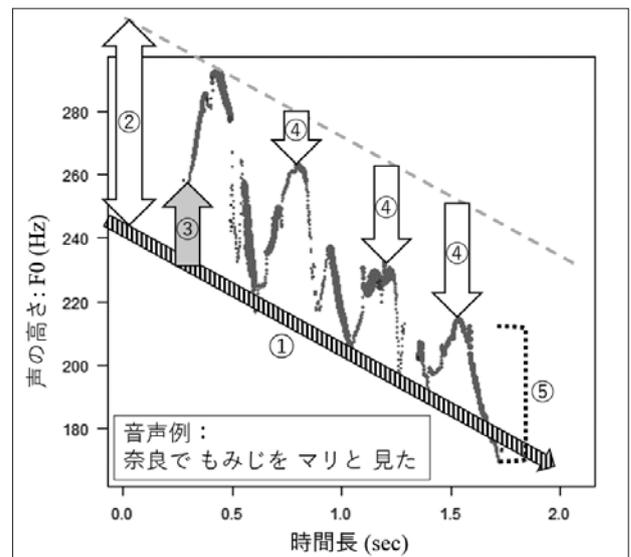
学外での収録の様子

す。日本語ではどちらも声の高さに現れるので、上がったりがったりする話し声のどこがアクセントでどこがイントネーションなのか、ふたつの相互関係はどうなっているのか、教えるにはそういった知識が必要です。さらに、教育目的となると、外国人学習者が話す日本語のどこが日本人と違うのか、その違いのせいでコミュニケーション上の誤解が生じるのかなどについても説明しなければなりません。そのための情報を探しましたが、参考書や研究論文には十分な情報量がなく、未解明の部分があることもわかり、自分で研究する道を選びました。研究の最終的な形としては、「日本語の合成音声モデル」の研究にヒントを得て、話し声を調整していると考えられる部分を指定して、数値で表すという試みをしました。図中の上がり下がりを表す曲線は「奈良でもみじをマリと見た」という話し声ですが、①から⑤は話し声を調整する部分です。例えば、①の数値が小さい人は②が大きいとか、組み合わせに一定の傾向が見つかれば、日本人と外国人学習者、方言などによる日本人グループ、個人の話し手の比較のために一貫した方法が使えるのではないかと考えました。

私の研究がこのような形に至ったのは、ご指導に関わってくださった先生方のおかげです。私の研究計画を唯一受け入れてくださった本学の林良子先生は、挑戦的な研究テーマに取り組ませて下さいました。アクセントとイントネーションの相互関係については本学のアルビン エレン先生のご授業で学

び、多くのご助言をいただきました。そして、両先生との共同研究の成果として、2019年度の日本音声学会で優秀発表賞をいただきました。在学中は、生活費と研究費を捻出するため、非常勤の仕事と大学内のアルバイトをしながら研究し、失敗してはやり直し、学会発表や論文の投稿にこぎつけるという忍耐を要する期間でしたので、紫陽会賞をいただけたことをとても嬉しく思っています。研究を進めることができたのは、新旧問わず研究に対する自由な発想を認め、サポートをしてくださる本学の研究環境があったからです。

博士後期課程に入学する前、「研究は長い旅になるよ」と私に言った友人がいますが、まさにそのとおりになりました。博士論文を書き終えた頃には、自分の研究が博士論文とともに完結するのではなく、その延長線上に2つの研究テーマが待っていました。ひとつは、方言ごとの数値を使った方言地図を作ること、もうひとつは、スラブ言語圏で日本語を学習する人達が話す日本語の音声的な特徴をデータベースにまとめることです。博士号取得は研究活動という長旅の始まりであるということを実感したのち、現在も2つの研究の実現を目指して励んでいます。



数値として表すことのできる声の部分

2021年度卒業式・学位記授与式

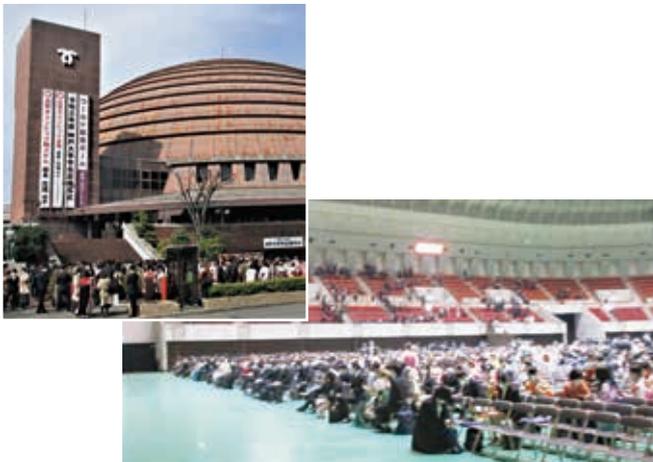
3月25日（金）、抜けるような青空の下、神戸大学卒業式がワールド記念ホールで開催されました。コロナウイルスの感染状況が若干落ち着いてきたことから、今回は2年ぶりに紫陽会からも青木会長が出席することができませんでした。後半の2年間、コロナ禍による様々な制約を克服し、この日を迎えた卒業生たちの清々しい表情が印象的でした。

午後からは、鶴甲第1・第2キャンパスに戻り、

学科ごとに学位記授与式が行われました。

青木会長が参観させていただいたグローバル文化学科の学位記授与後の祝賀会では、卒業生が自らの企画・進行により、笑顔あふれる懇親の会が持たれました。

紫陽会からは、今年度は記念に残る祝品として神大ネーム入りのボールペンを卒業生に送り、お祝いの気持ちを伝えました。



学位記授与式（ワールド記念ホール）



卒業・修了祝賀会（グローバル文化学科）

卒業式を終えて

宮崎 萌加

発達コミュニティ学科 2022（令和4）年卒

何よりも、コロナ禍において、卒業式を開催していただいたことを、ありがたく思います。学長のお話を聞きながら、入学式と同じ会場で卒業を迎えられたことに、とても感慨深い気持ちになりました。思えば4年前の私も、神戸大学で学ぶことができるという希望と、上手く馴染めるだろうかという少しの不安を抱きながら、同じように先生のお話に耳を傾けていました。あの日から、私は素晴らしい先生方のご指導のもとで勉学に励み、たくさんの友とかけがえのない思い出を作ることができました。特に、仲間達と開催した卒業演奏会は、私にとって忘れられない思い出です。

さて、在学中、私は主にピアノ実技や音楽理論などを学びました。その中で、「自分の能力を他者のために活かすことができるのは、やはり教育である」ということに気づかせてもらい、音楽教育について研究することを決めました。現在は、神戸大学の大学院に進み、より良い教育を実現するために、学びを深めています。今後は、大学で得た知識や思い出を胸に、大学院で専門的に学びながら、音楽教師として未来を切り開いていきたいと思います。

最後になりましたが、4年間お世話になった先生方、仲間達、そして家族に、改めて感謝致します。

教育実習事前実習講座

紫陽会が現役学生を応援する活動の一つに、2008（平成20）年度から始まった標記講座への講師派遣事業があります。教育実習（初等・幼児教育）に臨む学生たちが子どもたちとふれ合う前に、「知っていてほしい」と思われる基本的な事柄について、学校現場の経験者から講義をしてほしいという、学部からの要請に応えたものです。ここ2年はコロナ禍の影響でオンデマンド形式での講義でしたが、今年度は3年ぶりに対面での講義が再開され、下記の8名の講師が、教員を目指すこども教育学科の学生に教職のやりがいや楽しさを伝えました。

受講した学生からは、「実習に向けての不安が小さくなった」「子どもたちとの出会いが楽しみだ」など好評です。以下に、今年度の受講生の感想を抜粋していますのでご覧ください。

〔2022年度講座内容・講師一覧〕

（ ）内は対象課程

- | | |
|-----------------|---------|
| ・人権・同和教育（幼・小） | 岡田 治美 氏 |
| ・特別活動と学級経営（小） | 松田 忠喜 氏 |
| ・道徳の授業（小） | 清岡 延吉 氏 |
| ・家庭との連携（幼・小） | 板東 克則 氏 |
| ・こどもと生活指導（小） | 栗木 剛 氏 |
| ・基本的生活習慣の形成（幼） | 林 理恵 氏 |
| ・環境構成とクラスづくり（幼） | 黒田真由美 氏 |
| ・個の集団の育ちと保育（幼） | 岩濱里江子 氏 |

◎受講学生の感想から

- ・「基本的生活習慣」が「健康」と「人間関係」の二領域での基盤になり、また「道徳性」の芽生えにつながるという話が非常に興味深かった。
- ・「活動は作業ではない」という言葉が印象的だった。教師が子どもの様々な活動に意味を見いだす視点を持つことで、その生活や遊びの質は高まることわかった。
- ・保育者の表情、口調、態度、その一つ一つが、子どもたちの興味関心のきっかけとなり得る最大の環境であることがわかった。
- ・働き方改革が叫ばれる中、どこまで保護者の都合に合わせるか大きな課題だが、寄り添う気持ちを忘れてはいけない。「保護者とはこの1年と思わず、一生付き合っていくなさい」という言葉にはっとさせられた。
- ・教師に寄っていきたいけれど、寄ってくるのができない子のことも気にとめて、教師から話しかけること、子どもに聞かれたことは書き留めておくことなど、授業に関わらず、子どもに関わる上で大切なことを教わり、とても有意義な時間であった。
- ・非常に興味深く考えさせられる内容であった。実習先での子どもたちとの関わりを現実味を帯びて考えることができたし、実際にどんなふうに入ってもらえるのかイメージすることができた。





「神戸大学体育会系公認課外活動団体 OBOG会連合会」のご紹介

神戸大学体育会系公認課外活動団体OBOG会連合会

会長 新垣 恒 則

馬術部OB・元監督：経営学部 1965（昭和40）年卒

昨年1月の神戸大学役員会・教育評議会で承認され4月1日に発足しました「神戸大学体育会系公認課外活動団体OBOG会連合会（現在体育会51団体中33団体が加盟）」について紫陽会会員の皆様に説明させていただける機会をいただきまして有難うございます。

私学では当たり前のこととして存在する組織ですが、多くの国公立大学では体育会OBOG会の横の繋がりはありません。勿論現役・監督の横の繋がりもありません。

この様な背景を残念に思う方々が増えてきて、一昨年の春ごろより有志の間で連合会を設立したいという機運が盛り上がりました。ここ数年のスポーツ界における諸々の出来事から大学スポーツに対してプレゼンス、ガバナンスが必要となり更に外部資金の導入や学生の就職支援ならびに地域貢献が求められてきました。特に資金導入は単体のクラブ活動組織（現役・OBOGを含む）で対応することは難しく、大学と一体となって活動できる課外活動団体OBOG連合会の組織が必要と考えられます。

連合会としましては、上記の他に指導陣の人材育成支援・試合や大会への応援動員・会員相互の研鑽や交流、及び情報の交換等を行う予定です。設立以来、一年余になりましたが、その間に（一社）大学スポーツコンソーシアムKANSAI（KCAA）に加入して、学生支援の為にガバナンス・リスクマネジメントのレベル向上のために常に学外からの情報を得ていきます。その一環として、指導者向けに学生の事故発生時の対応セミナーや就活についてのセミナーへの参加をしてきました。またOBOG会長同士の横の連携・情報の開示によりOBOG会員の増加・会費の増加策、現役部員の増加策等についての成功例をそれぞれ発表いただく機会を2回設け好評を得ました。

大学からの情報がなかなか各部に伝わりきれてい



フー！ フー！ 神大

ない現状を踏まえて大学からの情報を連合会からOBOG会長と監督に適時提供する（監督のアドレスは現在大学当局に調査していただいています）。学生には体育会本部から主務LINEで情報提供する。この3つの流れで学長表彰・新歓祭情報・外部情報を各部の責任者に届くようにしていきたいと思っています。

本年の120周年記念事業募金の目的として「学理と実際の調和」の精神に則り社会をリードする人材を輩出し、進歩に貢献することを掲げていますが、今回はその一環として、社会性と人間性を備えたリーダーシップを持った人材の育成の為に、課外活動を積極的に支援する項目も頂いています。連合会を通じて神戸大学の学生・卒業生が今まで以上に母校を誇らしく思える大学にしていきたいと願っています。今後の活動につきましては、神戸大学コミュニティネットワークシステム（KU-Net）を通じてご紹介しますので、是非ともご登録していただきご視聴いただけますようよろしくお願いいたします。

現役時代各部に所属された皆様は、学部の壁を乗り越えて一致団結して部活をされてきたと思います。大学同窓会が神戸大学一丸とされる方向で進んでおられるのと同様に、我々も力をつけて神戸大学が益々発展していけるように努力したいと考えています。是非ともご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

紫陽会様の益々のご発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。

東京支部

コロナの影響で東京支部では本年も同窓会が開催できませんでした。そこで、前回に引き続き、活動報告書に代えて東京で活躍されている紫陽会メンバーのご紹介をさせていただきます。今回の「注目の若手」はワインテイスターでワイン専門会社を営まれている松浦尚子さんです。

ワインに魅せられて、そしてこれから

松浦尚子

教育学部初等教育科 1994（平成6）年卒

来年20周年を迎えるワインの専門会社サンク・センスは、現在、港区白金を拠点に、ワインスクール、ショップ、会員制クラブを事業の3本柱としています。特徴は、私が、フランス・ボルドー大学ワイン醸造学部でワインテイスターの資格を取得し、そこで学んだことを分かりやすくアレンジしてお伝えしている点です。当社では、ワインイベントや国内外ツアーなどワインの普及に関わる活動も行っています。

私は、神戸大学卒業後、教育・出版のベネッセコーポレーションにお世話になりました。バブル崩壊後の就職氷河期世代のはしりでしたが、総合職を希望し、岡山本社に配属されました。やり甲斐のある恵まれた環境でしたが、責任ある立場で一生働きたいと思う私には、当時、最も先進的なベネッ

セですら、女性が出世するには相応の覚悟が必要でした。考え抜いた末、会社を丸3年で辞め、ワインを学ぶためフランスへ留学しました。

留学を決意するきっかけとなったのは、ベネッセで出会った赤ペン先生たち（女性）です。

私の前の世代では、四年制大学に進学する女性は少数で、仕事も雇用機会均等法が施行される前は事務職が多く、ほとんどの人が結婚や出産で退社していました。この世代の赤ペン先生たちも非常に優秀であるにもかかわらず、アルバイトで働いている方がほとんどでした。こうした優秀な女性たちが最前線で活躍できないのは、日本社会にとって大きな損失だと感じました。私は好きなワインを日本に広めて、日本全国にいる知力もヤル気も高い女性たちの知的好奇心を満たし、日々の暮らしや食卓を豊かにしたいと思いました。

5年間滞在したフランスから戻り起業した当時、大手新聞、女性雑誌から数えきれない数の取材をいただきました。女性起業家に日の目が当たっていた時期でしたし、脱サラ？してボルドー大学でワインテイスターの資格を取得した変わった経歴が社会の注目を集めたようでした。

そんな中の一つの記事を読んで、私に講演依頼の手紙をくださったのが、当時紫陽会東京支部を立ち上げられた昭和38年卒の赤井さんと吹田さんでした。紫陽会講演会には多くの方にご参加いただき、ワインと食事を楽しんでいただくことができました。また、神戸大学の加護野教授からは、関西の経営者会合でワインの話をするお仕事もいただきました。右も左も分からなかった私に、神戸大学というご縁で、温かい手を差し伸べて下さったことに今でも大変感謝しています。

長年たった今でも女性を取り囲む環境には厳しいものがあります。今後は、現業に加え、様々な世代の女性支援の形で、日本社会に、神戸大学に、微力ながらも役立ちたいと感じています。



フランスの商工会議所のビジネスイベントでモデレーターを務める。

姫路支部

人とつながることの真意

三谷礼子

教育学部特殊教育学科 1985（昭和60）年卒

「せんせい」「先生」「校長先生」と呼ばれながら過ごしてきた38年間の教師生活を終えようとしています。現在は姫路市立勝原小学校長として勤務していますが、この学校は母校であり、教育実習で学んだ学校でもあります。そして40代の時に教諭としてお世話になり、またご縁をいただいております。

大学を出たばかりで右も左もわからない私は2年生担任として、姫路市立青山小学校に赴任しました。開校2年目の学校で校舎も新しく、バリバリと働いておられる先生方に何とかついていこうと必死になって頑張っている自分がありました。そんな初任の私でしたが、学年の先生方は学年会計の仕事や運動会・音楽会の指揮を任せてくださいました。なんとも頼りなかったとは思いますが、経験から力をつけさせようと配慮してくださったように思います。また、現在のように初任者研修がなかったので、時間的にも余裕があったのかもしれませんが、2年目は1年生の学級担任をし、全市の安全教育の授業をすることもできました。「せんせい」といつもきらきらとした瞳で声をかけてくれる子どもたちからエネルギーをもらって楽しい日々を過ごしていました。しかしいつも心の片隅にあったのは、特別支援教育に対する思いです。卒業時には特別支援学校に勤めたいと強い希望を持っていたので、3年が終わった段階で自分の方向性を決めようと思っていました。自分の出した結論は、「小学校で、特別支援教育に熱い思いを持ち続けながら教育を行っていくことも意味のあることだ」です。その思いは現在まで忘れることなく持ち続けています。特別支援学級の担任を経験することもなかったのですが、私の教育の原点は特別支援教育であり、3年生の時に神戸大学付属の特別支援学校で学んだことが土台となっています。実習では一人一人の子どもの実態を把握し何を

学習させるのか、どのように学習させるのかを考えて指導案を作りました。1回目の授業は散々なもので、落ち込んでいる私に指導教官の先生は「わかったでしょ。授業研究がどれだけ大切かということが。」と優しく話してくださいました。私は子どもたちに申し訳ないという気持ちにおしつぶされそうになりながらも、次こそはと奮起し、授業研究の日は自分なりに納得できるものとなりました。この時の思いも常々職員に伝えている「学び続ける教師であってほしい」につながっています。学校現場では多様な特性を持った児童に対応するため、日々奮闘しています。教職員は研修を重ね、保護者や関係機関と連携しながら子どもたちに向き合っています。新しい教育がどんどん入ってきても、子どもを軸とした教育観は普遍のものであります。

姫路支部は、2020年2月2日の総会・研修会・懇親会から2年間一同に会する会が持てていません。しかし、紫陽会のつながりは強く、毎年会にも出席して下さっている大先輩の黒田権大先生には、戦争の語り部として6年生の児童に話をさせていただいたこともありました。お会いするたびに私の有り様に対してお褒めの言葉をかけてくださり、学校現場で頑張り続ける原動力ともなっています。また、姫路支部支部長の米田淳二先生は、私の教育実習時に付属の特別支援学校で勤務されており、先生のはつらつと子どもたちに関わっておられる姿から自分の教師像を確立したように思います。

人とつながりやサポートは、時にはヒントを与えてくれ時には秘めたる力を引き出してくれます。人とつながりがあるからこそ得られるものがあります。そういうご縁に感謝の念を忘れず、日々成長し続ける自分でありたいと強く思います。

（姫路市立勝原小学校長）

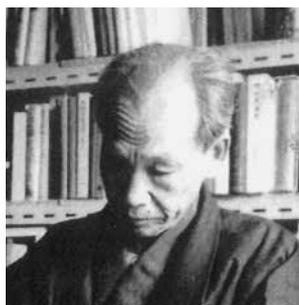


チョット昔、神戸大学教育学部に、こんな先生がおられた (森信三先生の思い出)

玉田 泰之

教育学部初等教育科 1960 (昭和35) 年卒

1. 自 銘



森信三先生

「学者にあらず、宗教家にあらず、はたまた教育者にもあらず、ただ宿縁に導かれて、国民教育者の友としてこの世の生を終えむ」

引き揚げて後、間なき日に。 不尽

不尽は、森信三先生の雅号。引き揚げてというのは、昭和21年(1946)6月7日、敗戦により満州・建国大学より舞鶴港への引き揚げを指す。

2. 略 歴

明治29年(1896)9月23日、愛知県知多郡武豊町の端山(はしやま)家に、男3人兄弟の末っ子として生まれる。実母不縁にして生家に去る。小作農の森家に貰われる。3歳。祖父は第1回国會議員。

大正7年(1918)23歳。広島高師の英語科に入学。西晋一郎先生の講義を受く。

大正12年(1923)28歳。京大哲学科に入学。西田幾多郎先生の講義を昭和6年3月末まで8年間聴講す。

大正15年(1926)31歳。哲学科(本科3ヶ年)を卒業。松本文子と結婚。大学院に籍を置きつつ、大阪天王寺師範の専攻科講師となる。

昭和14年(1939)44歳。満州・建国大学に赴任(単身)。塾頭拜命、46歳。学務課長に就任、49歳。

昭和20年(1945)50歳。敗戦によりソ連軍に拉致されるも、白系ロシア人の元建大生の懇情により1週間後に釈放さる。

昭和21年(1946)51歳。凍餓死を覚悟しつつ、

辛うじて6月7日舞鶴港へ。

昭和26年(1951)56歳。兵庫県立篠山農大へ、英語講師として勤務。

昭和28年(1953)58歳。塩尻公明学部長の推輓により、神戸大学教育学部教授に就任。7年間勤めて昭和35年3月、65歳で停年退職。

(寺田一清氏の作られた略年譜より抄録)。

3. 出 会 い

姫路分校で1年半の一般課程を終え、昭和32年(1957)10月から神戸の赤塚山学舎で2年半の専門課程を受けることになった。教育原理は必須の単位である。数人の先生がそれを担当しておられたが、私は森信三先生の講座を受けることにした。どんな先生か全く知らなかったのだが、今から思うとこのあたりから私の人生が決まりだしたような気がする。

当時私が心配していたことは、卒業論文が書けるかということで、最低400字詰50枚と言われていた。森先生の講義を受けていても気になるのはやはり卒論であった。何について書けばよいのか五里霧中という感じであった。が、ある時、先生は、「私はどんなテーマの卒論でも受けつけます」と言われたのであった。地獄で仏とはこのことかもしれない。この一言で、私は森先生に卒論を出すことに決めたのである。

生い立ちの記のような、高校生程度の作文を書き、「教師の人間革命」という大それた、穴があったら入りたいような題をつけて提出したのであった。

4. スタート直後にダウン

昭和35年(1960)4月、小学校教師1年目の私は、4年3組43名の担任としてスタートした。教育

実習では57名の6年生と2ヶ月間過ごしたが、教師になる決心をしたのは、この実習のお蔭である。楽しかったのだ。

しかし1学級を担当してみると、ずりしと重い責任を感じた。教科書を進めなければならない。宿題の点検、テストの採点、通知票の作成等々、その重さに耐えられずノイローゼになり、6月半ば遂にダウン。精神科の病院へ入院したのであった。幸い2カ月半の入院ですみ、9月から出勤し何とか1年目が終わったのである。

教師2年目の4月23日、わが町太子町に来られた森信三先生を、祖父と共に「わたや旅館」に訪ねた。先生は「腰骨をシャンと立てていないから、学校を休むようなことになるのです！」と言って、握り拳で曲がっていた私の腰骨（こしぼね）をぐっと押し下さった。多くの方々を支えられたこと、死ぬ勇気がなかったこと、そして森先生に腰骨を立てて頂き私なりに立て続けたこと、この3つによって、私は今ここにいる。(満85歳)

「立腰（りつよう）教育二十年」（370ページ）を自費出版し、森先生から身に余る序文を頂いた。

だが、今から当時を振り返ってみると、精神科の病院に入っていた教師にわが子を託すのである。父母からいろいろと抗議が出たであろう。しかし、私の耳には一切入って来なかった。学級委員の中嶋義浩様が、深く温かい大きな度量で私を見守って下さったからにちがいない。深謝限りなしの恩人である。

5. 端山（はしやま）護先生に出会う

「人生は深いえにしの不思議な出会いだ」これは詩人・坂村真民さんの言葉だが、教師3年目に端山護先生（森信三先生の天王寺師範時代の教え子。森先生の異母妹と結婚、森先生の実家・端山家を継ぐ。森先生とは義兄弟）にご縁を頂いた。読書が苦手な私を厳と慈で育てて下さった。また教育や人生について我が子を育てるように教え導いて下さった。私は密かに「わが精神育ての親」と呼んでいた。

端山先生は私が結婚するのを待ちわびて下さっており、昭和39年（1964）5月2日、森先生と共に

結婚式に参列して下さった。卒論を提出したとは言え、端山先生とのご縁がなければ、結婚式への森先生の出席はなかったであろう。これを縁に両先生は度々拙宅へも来て下さり、泊まっていただくようにもなった。

森信三先生が実践されたこと

1. 個人誌「実践人」（A4判8ページ）の発行。現在はB5判24ページの冊子型となり継承されている。只今790号。これによって全国の同志が繋がっている。
 2. 「森信三全集」全25巻発行。個人出版。全国の同志が求め、1200部出版。その後「続・森信三全集」8巻発行。
 3. ハガキ・手紙を書く。先生ほどハガキを書かれた学者はいないのではないか。ある時「私の書くエネルギーの8割は全国の同志へのハガキです」と言われた。
 4. 同志の求めに応じて、全国各地へ講演に行かれた。「講演行脚1000回を越ゆ」と「実践人」に出たことがあった。
 5. 15歳の時、静座の岡田虎二郎先生の偉容に接してから、生涯、腰骨を立て続けられた。膨大な全集の原稿は全て手書き、全国の同志へのハガキ書き、そして全国各地への講演、先生の超人的な生き方に驚歎した私は、ある時先生に尋ねた。「天は先生に強靱な身体も与えたのじゃないですか」。
- 「私は子どもの頃は小児喘息でした。体質としては、中の下くらいです」

「でも、先生のされていることを見ると、人間ワザではないような気がするのですが…」

「ここまで仕事ができたのは、腰骨を立てていたからです」

今もわが心にはっきり残っている会話である。

ある年の研修会で、立腰の効果について質問した参加者に先生は言われた。「効果はやってみたら分かる」。

「常に腰骨を立てる」のは理想だが、これをされたのは森先生だけである。立腰によって救われた私は、「気がついたら、腰骨を立てる」を提唱

している。

6. 森先生は、ハガキは「複写ハガキ」で残すことをすすめられた。最初に実践されたのは熊本県八代市の徳永康起先生である。その跡を継承して致知出版社の支援・協力を得て複写ハガキを全国へ広めたのは、広島県の坂田道信さんである。

また先生は読書の大切さを説かれ、読書会も提唱された。こちらは「実践人の家」の専務理事を長年勤められた寺田一清様と歴代理事長の尽力によって、全国各地に個性のある名前をついた読書会が生まれた。その数は百に近づいたのではないか。腰骨を立ててハガキ・複写ハガキを書く、腰骨を立てて読書会で本を読む、ということが広まれば、天界におられる森先生もきっと喜ばれるのではないかと私は思っている。

7. 全国の同志に、本を書き自費出版するよう、すすめられた。原稿を届けると序文を書いて下さった。同志発行の本への序文、193篇。先生が書かれた序文ばかりを集めた本を「実践人の家」で見ることがある。

8. 夏休み・冬休みを利用して、実践人研修会を開かれた。会場や宿泊の世話はその地方にいる同志がする。講師は森先生の他に先生と交流のある方やその地方の真人が話された。私は昭和38年から参加したが、愛知県豊川市ではトヨタ自動車の石田退三社長、比叡山では千日回峰行をされた葉上照澄師、島根県隠岐の島では永海佐一郎博士が講師であった。この研修会は先生亡き後も続き、現在も兵庫県尼崎市のホテルを会場に一泊二日、参加者200人規模で開かれている。参加者は全国各地から、身銭を切って（先生の教え）集まり、交流を深める。

森信三論について

令和2年（2020）11月25日は、三島由紀夫が自決して50年の命日であった。自決は三島が45歳の時で、命日は「憂国忌」と名づけられて今も続けられているという。国を憂えると言えば、森信三先生も憂えておられたのではないか。口には一切出されなかったが、先生には深い憂国の情があったにち

がないと私は思っている。

山縣三千雄先生（早稲田大学教授）は、全25巻の「森信三全集」により森信三論を書かれた。題名は「森信三の日本的正気の心実学と教育的実践」A5判55ページ。（これは「日本人と思想」山縣三千雄著・創文社の中に入っている）。その中には立腰教育についても書かれている。また、「教育の基礎になる世界観は正気でなければならない。そしてこの異様ななさが森教学の性格である。正気の定義は難しいが、全体的にバランスがあり、各機能が円滑に運行し、あやまっても復元能力があるものとしておく」と書いておられる。「正気」は三島と対比しておられたのかもしれない。

そして、この森信三論は次の一文で締めくくられている。

「すでに森の自覚像は光背を負っている。かかる光に対して矢を射ろうとする者はめしいになることを覚悟しなければならないだろう」。

・森信三先生。平成4年（1992）11月21日逝去。（97歳。命日を「不尽忌」という。）

先生はたくさんの語録を残しておられるが、教育語録の中では次の一語が…

○教育とは流水に文字を書くような果ない業である。だが、巖壁に文字を刻むような真剣さで取り組まねばならぬ。

師の教えを縁ありし方々に弘布することを、天が私に与えた使命と考えています。

●先生の本の出版 致知出版社

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前4-24-9

TEL 03-3796-2111

●先生の資料記念館・実践人の家

〒660-0054

兵庫県尼崎市西立花町2-19-8

TEL 06-6419-2464

（訪問時は前日に電話で確認して下さい。）

全ては神大女子寮から始まった！

榛原 久仁子

教育学部初等教育科 1982 (昭和57) 年卒

名称が『教育学部』であった頃、俗称は『鶴甲女子短期大学』でした。

神戸大学の中で、他学部と比べて女子学生の割合が高く、また経済・経営・法・文・理・農・工学部の学舎が集まっている六甲台地区から、更に坂道を上った鶴甲地区にポツンと建つ独立性を（おそらく他学部生が）揶揄したものではないでしょうか？

※因みに「短期大学」と呼ばれたのは…当時は『教養部』で2年間一般教養を履修後、各学部で専門課程を（医学部以外）2年かけて履修するシステムだった為

その教育学部では、毎日自宅（実家）から通学している学生が圧倒的多数でしたが、私自身は相当変わっていて…母と姉が押し付けてくる偏狭な女性観に反発を覚え、話の分かる父に相談して、自宅通学圏内にも関わらず、学生寮（神大女子寮）に入寮するという「穏便な家出」を執行していたのです。

ただ「ウルサイ母と姉から逃れたい！」一心で入寮したのですが、これが大正解！

一石十鳥ぐらい「お得」な女子寮で…まあ色々（文字にできない事も）ある中で、一番の収穫？は、神戸大全文学部（勿論医学部も）の女子寮生（外国人留学生を含む）同士が、一つの広いお風呂で文字通り「裸の付き合い」ができたことです。

※当時、神大女子寮は住吉女子寮一棟だけでした

各々異なる分野の学問をする者たちが共に生活する中で、多様な価値観に触れたこと、特に、第二外国語として中国語を履修中（当時はマイナー）だった私の特権？として、北京大学からの留学生（法学部院生）リンさんと半年間同室になれた事は《国際交流》というものがグッと身近に感じられた経験でした。多謝！

そして3年生になり、(旧) 文部省の国立大学生向け国際交流事業に応募して、冬休みの2週間を初夏のオーストラリアでホームステイしながら、現地の大学生たちと楽しく交流することができ…その後

もずっと行き来して（今はリモートで）お付き合いを続けています。Good Day Mates！

卒業後は香港日本人学校で、またロスアンジェルス日本語補習校でも、教職に就くことができたのは、教育学部『海外・帰国子女教育研究室』で学ばせていただいたおかげです。有り難うございました！

L.A.では、日本人海外駐在員と結婚し、長男を出産した頃、神戸大学同窓会（現・学友会）ロスアンジェルス支部会の存在を知り、（育児の息抜きに）仲間入りさせてもらいました。

「同窓会」と言っても、初めて会う人ばかり。それでも、神大OB・OGというだけですぐに親しくなり、世代も出身学部も越えて、一緒にテニス・ゴルフ・ビーチBBQパーティー etc. カリフォルニアライフを満喫できました。Mucho Gracias !!

帰国後は京都に落ち着き、長女を出産後、英語の教員免許を追加で修得し、家事&子育ての傍ら、非常勤講師として高校・大学に勤めて…

漸く時間に余裕ができた頃、「神戸大学ホームカミングデイ」への招待状を受け取りました。初めて参加したところ、学友会本部の方から凌霜会（経済・



今夏、住吉女子寮前にて

経営・法学部の同窓会)京滋支部会を紹介していただき…持ち前の社交性(厚かましさを発揮して入会させてもらい、伝統ある「三商大合同懇親会」にも(何故か)幹事として毎年出席することになりました。

この凌霜会京滋支部会の大きな賛同を得て、また、勤務校で知り合った紫陽会・六篠会(農学部同窓会)・くさの会(理学部同窓会)・文窓会(文学部同窓会)の方々もお誘いして、2010年春に学友会京滋支部会が誕生しました!

現在コロナ禍で、以前のような大きなパーティー

はできませんが、京都マナー(会食は4人/テーブル&2時間まで)を守って、気のおけない仲間と定期的にディナーを楽しんでいます。神大教養部以来の旧友も2人いらして…多分一生変わらない友情に感謝するばかりです。

最後になりましたが、L.A.でお世話になりました学友会L.A.支部会の皆様(メンバーは大分変わりましたが)と京滋支部会は、この10年ずっとリモートで交流を続けています。

SNSの普及にも大感謝!

(神戸大学学友会京滋支部会 事務局)

世の中に表現が「ある」を手伝う

那 木 萌 美

国際文化学部地域文化学科 2007(平成19)年卒

京都市を拠点とし、芸術文化事業の企画制作に10年ほど携わっています。NPO法人や地方自治体、公共劇場などでの勤務を経て、現在は個人事業主です。

まさかフリーランスワーカーになってまで演劇に携わっているとは、大学生の時分は想像だにしませんでした。芸術文化に関心があるものの、特にやりたいことが明確なわけではなかった私にとっては、総合芸術たる舞台芸術は近寄りやすく、神戸大学演劇部自由劇場に入部しました。特定の部署で花開くこともなかったのは、動機の次元に見合っているといえます。卒業後、他分野で就業したのち、結局は文化芸術事業を生業とするようになります。在学中に藤野一夫教授(現・芸術文化観光専門職大学副学長、神戸大学名誉教授)の授業で「アートマネジメント」に出会っていたことが、大きな理由でした。

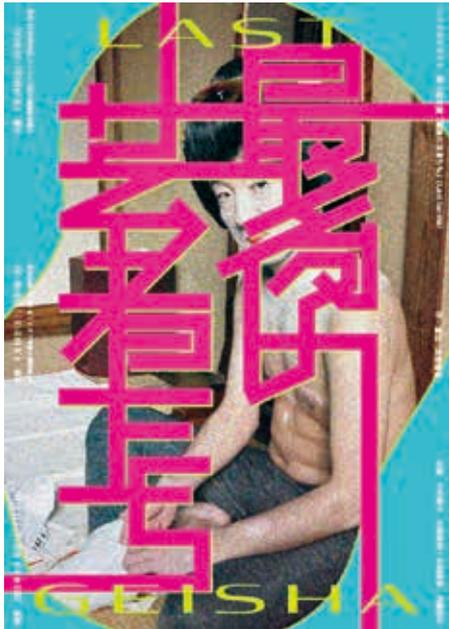
アートマネジメントは、芸術文化と社会との間に仲立ち役を設けるという考え方です。あまり身近に感じられないかもしれませんが、芸能人マネージャー、映画配給なども広くみれば同じ業界と捉えられるでしょう。芸術文化業界はおおまかには、絵画や彫刻といった美術、演劇やダンスなどの舞台芸術、オーケストラなどの音楽に分かれ、多くの人は

そのうちの一つ、さらに細分化された分野を深めて専門にします。

私の場合は、幼少期からの美術への関心が手伝い、舞台芸術のほか美術を主な業務領域としています。小ぶりな開催規模の事業を一人でハンドリングすることが多く、客席数で言うと数十~数百名規模であったり、数名で濃密におこなうワークショップを運営したりします。国内外から数十万人を動員するイベント(芸術祭)の事務局の一員として、具体的な運営を企画進行するようなこともあります。海外から芸術家を呼ぶとなると、ビザ発給申請から食品アレルギーのケア、日本土産のおすすめリストなど、やることはさまざまです。表現が世の中に「ある」状態がいつでも当たり前であることを、支えたいと思い活動しています。近年の具体的な活動を2つ、ご紹介します。

○ 潰えつつある「芸者文化」に取材した作品

磨き上げられた踊りや唄で客人を楽しませる芸者は、職業としては日本各地から潰えつつあると同時に、日本の接客や美意識を伝える存在と捉えられています。この芸者文化のはらむ矛盾に注目したパフォーマンス作品を、その立案者たちに並走し、取



ハイドロプラスト第3回公演
「最後の芸者たち」ビジュアル

材から3都市上演ツアーまで終えたのが去る9月のことでした。

立案・出資者の意図を汲み取りつつ、上演を具体化させる役割です。作品は、生まれただけでは畑の野菜のようなもので、誰の口にも届きません。作品と社会との間に入り、噛み砕いて伝えたり、作品が社会にインパクトを与える道筋を整えたりします。誰かをいたずらに傷つける可能性はないか、今ここで発表すべき事柄かなどもあわせて検討します。

地道で華やかさとは皆無の作業の連続ですが、創作の過程で兵庫県・城崎温泉で過ごした時間は印象的です。城崎には1970年頃には160名の芸者がいましたが、僅か10年後にはゼロとなりました。その“最後の芸者”である秀美さん取材。稽古もつけていただきました。70歳を過ぎててもなお美しく舞う姿に目を奪われどおしです。「小さい頃から踊りが好きで好きで、踊りで人をよろこばせる芸者の仕事が心から楽しい」とおっしゃるのを伺い、心打たれました。豊岡市公設の城崎国際アートセンターによる、宿泊滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）という制度にも支えられ、充実した創作時間となりました。

○ 木造和船の復刻

1970年ごろ以降、漁船や渡し船はFRP（強化プ

ラスチック）製が主流です。それ以前は木板をはぎ合わせた船が当たり前川や港に浮かび、各地で船大工がその土地や産業の条件に合わせた船を作っていました。しかしながら、船大工のもつ技術は、今や風前の灯です。丸太をくり抜いて船にする頃から高瀬舟、北前船といった構造船に発展する過程には、人間の叡知が詰まっていますが、産業的需要が衰えたことを理由に設計図や道具も含めすべて消失しかけています。



復刻された但馬地方の丸子舟（船大工：小川智彦）

この伝統的木造和船の造船技術の継承に、社会活動的に携わっています。私自身は船を作りません。調査の助手や、広報活動、助成金の申請などをおこないます。神戸大学海事博物館も、お世話になった見学先のひとつです。いつか人間が必要とした時に使えるよう、いわば技術の動態保存に参加しています。

船を復刻するという挑戦を、歴史や環境と人間とのありようを想像する、美術的行為としてとらえているという側面もあります。たとえば、びわ湖疏水の観光船が京都の山で育った木でできていて、ちゃぶちゃぶ、ぎっ、と櫓を漕ぐ水音に包まれるなか、ゆったりと進むようなものだったら…。そこに散る桜の風情も、今もう見えないとしても眼裏に浮かぶまちなみも、京都を訪れる人たちにとってまったく違うものになるでしょう。

郷里の大分県にてアートNPO法人職員として働いた際には、神戸大学社会科学系の同窓会である凌霜会大支部の諸先輩にもたいへんお世話になりました。非営利どころか地元企業に協賛金をお願いしてまわる身でしたから、銀行や大企業で活躍される方々とお話しし、この数値にできない活動を「社会

貢献]としてどう考えるか試される心持ちでした。芸術文化が稼げないのは当然と開き直るのも気が引けますが、やはり、人にとって欠かせない、公金を投じても然るべきものだと思っています。ただ、アートを「特別」「特権的」なものにしないことは信条にしています。学校へ芸術家を連れてゆく出前授業や、障害のある人たちの表現活動の支援にもコーディネータとして携わっていますが、そこに生まれる時間のゆたかさは計り知れません。100名の子どもたちとアーティストを会わせたとして、10年後、

1名しかそのことを覚えていなくてもそれでいいと考えています。幼少期によくわからないものに出くわした経験は、必ずや将来何かにつながるでしょう。スポーツや勉強と同じように、芸術文化が選択肢として常からあることが重要です。

現在は、自身がプロデューサーとなり経済的責任をもつ企画を立てることは数少ないですが、今後わかでも量を増やすつもりです。また、コーディネータとしての経験をいかし、芸術文化以外の業種に幅を広げて活動したいと考えています。

アメリカでの生活

小池 通輝

国際文化学部コミュニケーション学科 2003 (平成15) 年卒

自分でいうのもなんですが、私の経歴は神戸大学の、とりわけ国際文化学部の卒業生としては異質なもので、卒業生のその後としてはあまり参考にはならないかもしれません。現在はアメリカ、カリフォルニア州のシリコンバレーと呼ばれるエリアにあるクパチーノ市に住んでいて、職業はカイロプラクターをしています。カイロプラクターというものがそもそも日本であまりなじみがないかもしれないのですが、クリニックなどで腰痛や頭痛、肩こり、その他スポーツでの怪我等、さまざまな身体の不調などに悩んでいる人を診る専門職です。神戸大学在学中は、現在は存在しない国際文化学部の文化規範論に所属していました。神戸大学を卒業した年の夏

に留学で渡米してそのままなので、来年でもう在米20年になります。最初はアスレチックトレーナーという職業を目指してアメリカに渡って中西部のオハイオ州で3年間を過ごし、卒業とともにアスレチックトレーナーの資格を取得しました。その後、カイロプラクターの資格を取るためにロサンゼルス市近郊にあるカイロプラクティックの学校に1年、その後現在住んでいる場所に近いサンノゼ市にある別のカイロの学校に編入し、卒業とともにカイロの資格を取得しました。卒業後に在学中からインターンとして働いていたクリニックでアソシエイトドクターで勤務しながら永住権を取得して、その後独立して自分のクリニックを開業して現在に至っています。

普段は自分のクリニックで患者さんの診療を行っており、プライベートでは3児の父として子供に日本語を教えたりサッカーを教えたりしながら生活しています。本業に関するところで、過去にあったアメリカならではの経験としては、学生のころはMLBのダイヤモンドボックスでスプリングトレーニング中にインターンをする機会に恵まれました。またカイロプラクターとして独立してからも、コロラド州のコロラドスプリングスにあるオリンピック・パラリンピックトレーニングセンターで、当時



USOPTCで同期のメディカルボランティアと

は半年後に迫っていた東京オリンピックを目指してトレーニングしていたオリンピック/パラリンピアン、もしくはその候補生のケアをする医療メンバーとして2週間のローテーションに従事するといったような経験を得ることもできました。

またここ10年くらいは、カイロプラクターとしての本業以外に、バイエリアに住んでいる日本人コミュニティに向けて様々なイベントを開催したりするようなこともしています。「バイエリア80年代会」というコミュニティを作って定期的にBBQやポットラックパーティーなど開催したり、大人も子供も集めて「シリコンバレー大運動祭」という400人規模くらいの日本の運動会を開催したりもしました。また、たまたま現地の神戸大学同窓会の幹事をやることになったのがきっかけで、現地の他大学の同窓会と一緒に合同大学同窓会BBQを行ったり、神戸市と連携して海外で神戸の魅力を伝えるための団体として「Kobe International Club」のシリコンバレー支部を発足することになったりもしました。他にはJYSOという現地で日本語を話す小1から中3の子供たちを対象にしたサッカー教室で、代表コーチ兼メディカルスタッフとして日本語で子供たちにサッカーを教えるなどしています。

すべてボランティア活動のため全くお金にはならないですが、おかげでいろんな人たちと知り合うことができ、これまでに様々なイベントを共に作り上

げることができました。日本からアメリカに来たばかりで、全く知り合いもないような状況の人にとって、こちらでの生活になじめる最初のきっかけを作ることができたり、ある子供たちにとってはサッカーを始めたきっかけや、その後ずっと友達になることになる子との最初の出会いの場を提供できたりと、自分自身も様々な経験をしつつ、多くの人にとって大小あれど何かのきっかけになる「場」を提供することができればいいと思い活動をしています。

私の場合は今の本業と国際文化学部で学んだことに直接繋がりがあるかと言えばあまりないのですが、今住んでいるシリコンバレー、もしくはバイエリアと呼ばれる場所は文化的にも立場的にも様々なバックグラウンドを持った人が入り混じった非常に多様性に富んだ地域で、特に子供を育てるにおいて非常に興味深いエリアだと思っています。私自身はある程度大きくなるまで日本で生まれ育って、その後自分の意思でアメリカにきた人間ですが、日本人の両親を持ちながら小さいころから異国で育ち、様々な人種やバックグラウンドを持った人が混じっているのが当たり前の環境で育っている自分の子供たちがこれからどんな人間に育っていくのか、ちょこっとした申し訳なさや、不安、楽しみなどが入り混じった状態でいつも見守っています。

僕らには空洞が必要だ

太田光海

国際文化学部国際文化学科 2012（平成24）年卒

今は無き神戸大学国際文化学部、通称「コクブン」は、とことん中途半端な学部だ。記憶によれば就職率は神大全体の中でも良く、入学の難易度も高めだった。しかし、なんとなくインターナショナルで華やかな雰囲気はあるものの、実際に何を学ぶ場なのか確認めいたことは言えない。早稲田大学や上智大学が擁する国際教養学部に近いようにも思えるが、教育は英語で行われるわけではなく、在学中の

留学が義務付けられているわけでもなかった。華やかさと地味さの間を行ったり来たりする、不思議な香りがあった。それがとても良かったのだ。

国際関係論、比較文学、政治哲学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズ、コンピューターサイエンス、科学史、美術論、映画論、言語学、メディア論など、パッと思い出すだけでも、「国際文化」という語感からなんとなく連想されるあらゆる講義

やゼミがそこにはあった。しかし、「国際文化学」というドンピシャの講義は存在しない。中身は空洞であり、その空洞を埋めるのは自分自身だ。僕が神大を卒業した10年前にも言われていたが、世界はますます予測不可能になっている。もはや3ヶ月後にどんな世界になっているのか、皆目見当が付かない。中途半端に、それでいて深く専門的に、様々な学問を「かじる」ことができるコクブンの教育は、在学中は不真面目な学生だったとはいえ、こんな風になっちゃった世界を生き抜くための、自分のベースになっているとつくづく思う。

この世は捉え所がなく、確実なことはほとんどない。科学の威信も揺らいでいる。しかも、揺らぎながら多極化し、極点同士の対話がどんどん難しくなっている。変わらない自分の芯など持っていたらたちまちポキッと折れてしまうか、芯が地面に刺さったまま身動きが取れなくなる。だから今、僕らには空洞的な思考が必要だ。空洞には物質的な制約も、数値化の必要性もない。そこには複眼的思考を無限に取り出せる不可視の泉を作ることができる。それは、宙に浮きながら存在を許容し、必要とあれば恐れずに思考や行動を飛躍させるために必要なものだ。

仮に神戸大学国際文化学部が目指す「理想の人物像」があるとするれば、僕が辿った進路がそれに当てはまるかはわからない。中学生の頃は国連職員になろうと思っていたが、結果的に僕は文化人類学に傾倒し、映像表現を身に付け、アマゾン熱帯雨林の森に身を委ねる旅に出た。今後も僕は、自らの思考と直観を頼りに、自分自身も予測できない変化を遂げていこう。その時、10代後半から20代前半にかけて、コクブンで中途半端にかじった様々な学問の淡い記憶が、確かに僕の身体に刻まれていると確認することになる。神大卒業生に、幸あれ。これから入学する学生たちに、幸あれ。

(映画監督・文化人類学者)



アマゾンの熱帯雨林にて

多くの課題と格闘中～小学校現場から～

長房 毅

教育学部初等教育科 1995（平成7）年卒

神戸市垂水区にある小学校に勤務しています。これまで教諭として小学校に勤務し、子供たちが楽しく有意義な学校生活を送れるように、あれこれ考えてきました。しかし、気が付けば教頭4年目。いわゆる「管理職」となり、業務の対象が「子供たち」から「学校」となり、考え事や悩みが増えました。喫緊の課題としては、「学校業務の改善」、「若手教員の育成」の2つが挙げられます。どちらの課題もすぐに解決するものではありませんが、校長や総務、研修担当とも相談しながら、少しずつ進めています。「学校業務の改善」は、教育委員会より「行

事の削減や簡素化」等の具体的な方向性が通知されていますので、そのまま自校で採用していけば一件落着と思うのですが、子供たちや保護者、地域の方の理解を得ながら進めないと、「学校は楽をしているだけではないのか？」等の苦情や学校批判にも繋がりがねません。また、業務を減らすはずが、逆に増えてしまうこともあります。「教頭業務の一部を主幹教諭や事務職員へ移行すること」も指針にあるので実際に移行してみると、引継ぎ等の打合せや最終確認の時間が逆に増えてしまったり、そして責任だけは教頭のままだったり、これまで通り教頭業

務の方がよかったのではないかと、思うことができました。

「若手教員の育成」も難しい問題です。そもそも「育成」とは何をもって終了なのかも曖昧ですし、若手教員が業務を行う「職場環境」も社会情勢と同じく大きく変化し、多種多様になりました。とにかく私が若い頃とは環境が違いますので、「見通しをもつこと」、「報告・連絡・相談」の2つのみを簡潔に伝えるようにしています。私が初任時代のことですが、同じ学年だった先輩から、「20代は学級のこと、30代は学年のこと、40代は学校のことを優先しよう。」と教えてもらったことを覚えています。大まかな見通しですが、私にとっては余裕をもつことにつながり、大変ありがたい助言でした。最近では、どこの学校も若い先生方が多いので、助言通りに仕事を進めると学校全体が回らなくなりますが、少し先の自分をイメージしながら仕事を進めることで余裕が生まれることは間違いありません。また、自分だけで問題を抱えずに先輩に相談すること、先輩の働きや言動をよく観察することも併せて伝えていきます。

5年程前から、大学時代の友人と月に1回程度サイクリングを始めました。日頃の運動不足解消もさることながら、互いの仕事の近況を伝える中でヒン

トを得たり、悩みの解消へと繋がったりと、ありがたい時間となっています。友人は工学部出身で、現在は某重工業メーカーの課長職。業務内容は全く違いますが、抱えている悩みや業務の進め方などは類似点が多いです。友人の話でよく出てくるキーワードが「納期」。納期に間に合わないと億単位で損害が出るので、納期前は終電帰りや泊まり込みの日が多く、ストレスが溜まるという話を聞くと、自分の悩みが正直些細なことのように感じます。家と職場の往復だけが続く悩みや不満が大きくなり、それが不安に繋がるので、気が滅入ったときほど視野を広げ、多くの意見を聞くように心掛けています。

教育現場には、他にもいじめや不登校児童の問題をはじめ、GIGAスクール構想や外国語教育など、課題が山積しています。また、教員が疲弊し、教員志望の学生が減っている報道も気になります。しかも、現在コロナウイルス流行の「第7波」が継続中。まだまだ、教職員も子供たちも安心して学校生活を過ごすことは難しい状況が続きそうです。目の前に立ちのぼる課題は今後も増えそうで、暗澹たる気持ちになりそうですが、一人で問題を抱え込まず、支えてくれる多くの方々の意見に耳を傾けながら、少しずつ進んでいこうと思います。

先輩からのメッセージ

KU-Net (神戸大学コミュニティネットワーク) に各学部の先輩たちから後輩たちに温かいエールを贈るコーナーがあります。そこに掲載された発達科学部と国際文化学部卒業生からのメッセージを転載します。

中島 (南郷) 晃子

総合人間科学研究科 2013 (平成25) 年卒

ろくでもない学生でした。美術部に入っていたのですが、当時の美術部にはこたつがありました。まずはそこでゴロゴロして、必修科目の時間になると、鶴甲キャンパスまで降りて行き、油絵の臭いを撒き散らしながら授業を受けて、そしてまた部室へ登っていくという生活をしていました。絵は下手でしたが、枚数を重ねたおかげで卒業するころには、少し

は上達していたような気がします。

卒業後はあろうことか修士課程に進みました。そして、あろうことか博士課程に進みました。修了まで長い時間がかかりました。修了後は、大学附属の研究センターで働いていました。みなさんが想像もつかないほど、長い長い間神戸大学にいました。もしかすると、地縛霊なのかもしれない、私は他の人にはみえず、動けなくなっているお化けかもしれないと想像していました。

みなさんは、残された人間が春をどのようにむかえるか知らないでしょう。春はたいへん苦しい季節です。桜の咲くキャンパスをキラキラした生命の群が歩いている。私もかつてはその中にいて、けれど私の側にいた人たちはもうおらず、ただ私だけが新しいキラキラを見つめている。そのキラキラもいつか私を残していなくなる。今、違う場所に仕事に行くようになって、神戸大学の地縛霊でなかったとわかり、たいへんほっとしています。

学生時代よかったことは幸せだったことです。図書館に行って本を読む。部室に行って絵を描く。お金がないから、学相（という日払いのバイト情報などを出している場所がありました）に行き日銭を稼ぐ。毎日、今日が自分自身の手の中にあると思っていました。そのように思えたのはその頃だけです。

メッセージをとのことですが、ほっておいてもキラキラするみなさんに私から言えることなど何かありますでしょうか。みなさんは与謝野晶子の歌のように、おごりの春のただなかです。

それでも今、年をとって、若い頃の自分のために絞り出すと、早寝早起きをするべきということでしょうか。辛くて苦しくてもう無理だという瞬間も、たくさん寝ていると結構元気に乗り切れます。本当にそうです。昼過ぎまで寝てしまった「たくさん寝た」は、苦しさを倍増させます。早朝シフトのバイトをするのです。もちろん個々の体と心の調子があるでしょうが。今かつて19だった私にアドバイスをするのならそんなところですか。あとは、小遣い帳つけて収支計算をしたほうがよいということですか。

よい神大ライフを。(大学勤務)

田中 雄一郎

発達科学部人間環境科学科 2001(平成13)年卒業

■ 学生生活

自分が疑問に思ったこと興味を感じたことに、時間をかけて向き合うことのできるかけがえのない4年間であったと思います。

ある時、学部の講義で戦後の平和について議論したことをきっかけに、平穏な生活の先行きに言い様

のない不安を感じ、いてもたってもいられなくなったことがありました。教授の示唆もあり、平和に背を向けた時代の空気を知らなければ、この不安は解消しないと思うに至り、夏休みの2カ月間、六甲台の図書館にこもって、朝から晩まで終戦前後の新聞をひたすら読み漁る日を繰り返しました。視力が落ちましたが、視界はより開けたように感じました。

また、講義で扱われた新書を読んで、当時まだ開発途上と言われていた東南アジアに強く興味を抱いたことがありました。学部のゼミで、フィリピンのフェアトレード団体とタイアップした研修を催しているとのことだったので、半月ほど参加させてもらい、現地の農家と交流したり、スラムに寝泊まりしたりする中で、かの国の人々の日常を体感するという毎日を過ごしました。帰国後に新書を読み直したところ、倍ほど面白く感じ驚きました。

他にも、在学中の思い出を挙げればきりがありませんが、いずれも知りたいことを知るために、自由に時間を費やし愉しみを得ることのできた貴重な経験であり、自身の価値観の礎になっていると感じます。そして、神戸大学にはそうした経験を学友と共有できる素晴らしい環境がありました。

■ 在学生の皆さんへ

私自身は、転職の際に非常に思い悩み苦しい時間を過ごした経験がありますが、学生生活を通して得た価値観はぶれることはなかったと思いますし、拠り所になったのは指導教官の叱咤と学友の助言でした。

コロナ禍により、大学の活動に大きな制約が課せられた状況を目にし、元学生として忸怩たる思いです。それでも、神戸大学で過ごす時間が皆さんにとって一生の宝となることは間違いありません。限られた時間ではありますが、あらゆる経験を糧とする意気込みで濃密な学生生活を過ごしてほしいと願っています。

(市役所勤務)

2022年度 評議員会（書面表決）報告

8月6日（土）に開催予定でした評議員会は、7月からの新型コロナウイルス感染の急速な拡大のため、今年度も開催を取りやめ、承認事項については昨年同様、書面表決手続きにより審議していただくこととしました。7月下旬に幹事、評議員等の議決権者117名に書面表決用評議員会資料を送付し、8月末の期限までに90名の返信をいただきました。

その結果、90名全員の方から本部提案の

- ①2021年度 事業・会計決算報告・監査報告
- ②2022年度 役員組織（案）
- ③2022年度 事業計画・会計予算（案）

について承認をいただきました。ご審議いただいた皆様にあらためてお礼申し上げます。

2022年度の事業計画・予算執行の特徴的な事柄

としては、

- ・新会員名簿発行の取りやめ（個人情報保護の観点から）
- ・翔鶴会（国際文化学部同窓会）会計との一体化を進めること
- ・神戸大学創立120周年事業、募金への積極的な参画などがあげられます。

従前より会費納入率の低下が危惧されていますが、必要に応じ支出の見直しを行いながら、これからも学生支援と同窓生の連携を柱にした事業を行っていきます。ご理解、ご協力よろしくお願いいたします。

2021年度 事業報告

（大学関係行事・活動を含む）

2021年

4月6日（火）	神戸大学入学式 学部ガイダンス（オンライン）
4月16日（金） ～23日（金）	教育実習事前実習講座 （オンデマンド形式8講座）
4月24日（土）	役員会①
5月	役員・評議員名簿確認作業 Ku-net「先輩からのメッセージ」掲載
6月	幹事会 中止
6月16日（水）	会誌編集会議①
7月7日（水）	会計監査会
7月10日（土）	役員会②会誌編集会議②（評議員会中止決定）
8月2日（月）	学部長との懇談会①
10日（火）	評議員会書面表決手続文書発送
27日（金）	同 書面表決手続完了
9月18日（土）	役員会③ 会議編集会議③
9月30日（木）	紫陽会賞授与 和田 綾 氏
10月8日（金）	〃 戸田 紘 氏
10月10日（月）	会誌編集会議④
10月30日（土）	第15回ホームカミングデイ（Web開催）
11月13日（土）	六甲祭（オンライン開催）
14日（日）	
12月6日（月）	紫陽会賞授与 相馬 寿明氏 坂田 雅之氏
12月8日（水）	紫陽会賞授与 木元めぐみ氏
12月10日（金）	会誌「紫陽会」2号発刊

2022年

1月22日（土）	役員会④ 学部支援基金委員会
1月27日（木）	学部長との懇談会②
3月7日（水）	新入生向け「紫陽会」PV公開 新会員名簿発刊
3月25日（金）	神戸大学卒業式・学位記授与式

2022年度 事業計画

（大学関係行事・活動を含む）

2022年

4月5日（火）	神戸大学入学式 学部ガイダンス
4月8日（金） ～22日（金）	教育実習事前実習講座（7講座）
4月23日（土）	役員会①
5月9日（月）	学部長との懇談会①
6月4日（土）	役員会②会誌編集会議①
6月18日（土）	幹事会・会計監査
8月6日（土）	評議員会 中止 書面表決手続文書発送 同 手続完了
8月31日（水）	役員会③会誌編集会議②
9月17日（土）	会誌編集会議③
10月17日（月）	第16回ホームカミングデイ
10月29日（土）	第12回紫陽会賞授与式 六甲祭
11月12日（土） 13日（日）	会誌「紫陽会」3号発刊 神戸大学120周年記念式典

2023年

1月中旬	役員会④ 学部支援基金委員会
1月下旬	学部長との懇談会②
2月～3月	各支部総会（コロナ禍の状況により対応）
3月下旬	神戸大学卒業式・学位記授与式

会員の皆様のご協力・ご支援を

1990（平成2）年3月～1992（平成4）年3月に、ご卒業・ご修了の皆様へ

特別維持会費納入のお願い

神戸大学が国立大学法人へ衣替えして以降、大学運営にかかわる予算が激減し、各学部とも財政面で逼迫が伝えられています。紫陽会においても、近年、同窓会活動に対する意識の変化もあり、会費納入率が低下しています。特に、コロナウイルス感染症が広まってからはその傾向が顕著です。そこで大学・学部への支援を継続し、同窓会活動を円滑に行うための「特別維持会費」の納入についてご協力をお願いいたします。

例年、ご卒業・ご修了30年を迎えられた会員の皆様をお願いをさせていただいており、本年は1992（平成4）年3月卒業・修了の方々が該当いたします。ご無理申し上げますが、趣旨をご理解の上、納入にご協力いただくようお願いいたします。

同封しました所定の振込用紙に、必要事項をご記入の上、お振込みいただければ幸甚です。

お詫び

2020年度、2021年度会誌において、支援をお願いする卒業年次の記載に誤りがありました。1988

（昭和63）年3月、1989（平成元）年3月卒業の皆様には、過年度との重複してのお願いとなり、大変ご迷惑をおかけしました。また、1990（平成2）年3月、1991（平成3）年3月卒業の皆様には、該当年次にもかかわらず、ご依頼が抜けており失礼いたしました。心よりお詫び申し上げます。

記

1. 今年度の依頼対象

神戸大学卒業・修了30年を迎えられる方

- ① 1992（平成4）年3月の卒業生・修了生
- ② 1991（平成3）年3月の卒業生・修了生
- ③ 1990（平成2）年3月の卒業生・修了生
（②③は過年度会誌でご案内もれのため）

2. 納入依頼金額

1□1,000円 できるだけ5□以上(原則1回)

※卒業年や原則1回にこだわらず、趣旨に賛同しご協力いただける方については任意の金額で結構です。

学部支援基金ご協力のお願い

本会の学部支援基金は2004（平成16）年度より神戸大学発達科学部並びに神戸大学院人間発達環境学研究科の支援を目的として設立されました。その後、2017（平成29）年に発達科学部と国際文化学部の発展的統合により「国際人間科学部」が誕生し、当基金も新学部・研究科の学修・研究活動支援を目的に事業を継続しています。

地域文化・地域教育の発展充実に寄与してきた師範学校、教育・発達科学部の歴史と伝統が国際文化学部で育まれてきたグローバルな視座と融合し、さらなる発展が期待されるところです。新生学部への

支援事業を充実・継続していくためには、会員の皆様のご支援を心からお願いいたします。

記

募金金額	正会員	1□	10,000円
	準会員	1□	5,000円

募金方法 所定の振込用紙
(今回も同封しております)

郵便振替 01140-0-84600
(学部支援金と明示してください)

会員寄贈図書一覧

1996（平成8）年の「あなたの著書を大学図書館に寄贈を」との呼びかけ以来、335冊の編著書が寄せられています。

ここでは「会誌2号」以降にご寄贈いただいた図書6冊をご紹介します。これらの編著書は国際人間科学部鶴甲第2キャンパス（元発達科学部）の人間科学図書館内専用書架にあり自由に閲覧できます。

書名	著者名	卒業・終了年次	出身母体	寄贈年月	コメント
米寿記念冊子	北山 學	S.31.3	教育	2022.1月	米寿を迎え新聞に掲載の新聞記事と表彰記録から米寿記念冊子を発刊
続 もの言い	藤本 直子	S.54.3	教育	2022.2月	2020年春に出した「もの言い」の続編
熊野本宮一音無氏の研究	音無 篤	S.61.3	大学院 教育学研究科	2021.8月	熊野本宮にゆかりのある音無氏に関する研究
近現代日本教員史研究	船寄 俊雄	S.54.3	教育	2022.1月	神戸大学退官記念に指導生たちと共に日本教育史についての長年の研究成果をまとめたもの
思考力・表現力・協同学習力を育てる—主体的な学びをつくる国語総合単元学習—	遠藤 瑛子	S.40.3	教育	2022.4月	神戸大学発達科学部附属住吉中学校での国語科としての新しい力、見ることを新領域にした探求的・創造的な実践研究
ことばと心を育てる—総合単元学習—	遠藤 瑛子	S.40.3	教育	2022.4月	神戸大学教育学部附属住吉中学校での国語の力をつけるために考えた学習方法の実践研究第1集

神戸大学同窓会紫陽会 著書寄贈票

書名					
内容の簡単な紹介 (2行以内で)					
出版社名	発行年月日	年	月	日	
定価	頁数	頁	A 5判・B 6判・()		
著者氏名					
住所	〒				
電話番号	-		-		-
E-mail					
卒業・修了年次	大正	・	昭和	・	平成
卒業・修了学部・学科					

※ 著者以外の方が寄贈者の場合は次にもご記入ください。

寄贈者氏名	〒	-	-	-
住所	〒			

※ この票をそのままご使用くださるか、B 5 版でコピーをしてご使用してください。

あじさいの小径（編集後記）

新型コロナウイルスの感染拡大、ロシアによるウクライナ侵攻、安倍元総理銃撃事件と暗いニュースが多い中、最近私を元気にしてくれた話題を二つ、皆さんにお裾分けさせていただきたい。

一つ目。今年8月12日(金)神戸新聞朝刊に次のような見出しの記事が掲載された。「ウクライナから神戸へ、角界目指すヤブグシンさん」「土俵の絆 希望をつなぐ」



以下記事を要約すると、今年4月ウクライナから日本の角界入りの夢を追ってダニーロ・ヤブグシンさん(以下ダーニャ 18)が来日した。彼が頼ってきたのは関西大学4年、相撲部の山中新大(あらた)さん(23)。二人の出会いは2019年堺市で開かれた世界ジュニア相撲選手権大会。ダーニャの強さと、負けた相手に自分から手を差し伸べる心意気に目を奪われた山中さんが声をかけ、そこからインスタグラムでのやりとりが始まった。2月のロシアによるウクライナ侵攻後、日本の角界入りの夢を持つダーニャは、日本への避難を希望し山中さんに連絡を取った。山中さんのサポートでデュッセルドルフ日本総領事館に連絡を入れたダーニャ、山中家が受け入れ先となりビザが発行され無事来日できた。

実はこの山中さんは私が神戸市立夢野中学校校長時の教え子である。中学校は野球部員だったが高校では相撲部に入部しインターハイに出場した。進学先の関西大学でも相撲部で活躍し、大学4年生の今年、主将として臨んだリーグ戦で長年2部に低迷していた相撲部を1部に復帰させる原動力となった。

山中さんは目の前にある事柄から逃げずに真摯に向き合うことができる生徒だった。その積み重ねがインターハイ出場、大学相撲部の一部復帰という結果につながったのだろう。ダーニャの一件も「8,200km離れたところにいる友人が今困っている。彼のために何か自分ができることはないか。」そんな素直な気持ちが彼に行動を起こさせたに違いない。

この教え子を誇らしく思うとともに、長年平和の尊さを子どもたちに説いてきたにもかかわらず

8,200kmの距離の外に立っている自分を情けなく思っている。紫陽会会員の皆様、今からでも遅くはない。世界が平和であり続けるために一人一人ができること、何か行動を起こしましょう。孫たちの世代が安心して暮らせるように。

二つ目。東京オリンピック・パラリンピックがコロナ禍のために1年延期されたのは記憶に新しいところだが、同じく世界大会で昨年開催予定が今年に延期になった種目があるのをご存じだろうか。

9月13日夜、何気なく見ていたネットニュースで「ラグビー女子日本代表ニュージーランド遠征メンバーのお知らせ」という記事を見つけた。もしかしてという予感でページを開いた瞬間、私の眼はある選手の名前にくぎ付けになった。その名前は「名倉ひなの」。

彼女も神戸市立夢野中学校校長時の教え子である。中学校時代はバレーボール部に所属し運動能力の高さには定評があった。高校で7人制ラグビーと出会い、注目された選手だった。私は彼女に関するその後の情報を持ってなかったため、彼女がラグビーを続けていることを知らず、ページを開くのに確信を持ってなかった。記事には「ニュージーランド遠征メンバーは10月8日開幕のラグビーワールドカップ(RWC)2021ニュージーランド大会の登録メンバー32名です。」と書かれていた。

今大会で女子日本代表(サクラフィフティーン)はプールBでカナダ、アメリカ、イタリアと対戦する。予選3試合ともJSPORTSで放送予定なのでテレビ観戦し、8,700km離れた地に力の限り声援を送る。本号がお手元に届くころにはすでに結果が出ている。教え子が桜のジャージに身を包み、フィールドを縦横無尽に駆け回る。想像するだけでワクワクする。サクラフィフティーンに勝利の女神が微笑まんことを。

国際人間科学部同窓会誌第3号いかがでしたでしょうか。「あじさいの小径」は教え子自慢が多少鼻についたかもしれませんがご容赦願います。

大学はどんどん変化しています。今後も大学の様子について皆様に発信できるよう内容を充実させてまいりたいと考えています。皆様のご意見・ご投稿などお待ちしております。

皆様の投稿をお待ちしています。

問い合わせ・宛先

〒650-0011 神戸市中央区下山手通6-2-19
神戸大学同窓会紫陽会事務局(月・水・金 9:30~15:30)
電話078-371-6322 FAX 078-371-6306
Email kobe-ajisai@shiyohkai.com

地区・支部・教科回生コースの動向や会合について
随想・意見・論評・歴史地誌・趣味等々について